

Title	平安末写三教指帰敦光注について：解題と翻印
Sub Title	Bibliographical note on the oldest manuscriptal commentary of Sango-shiki and its complete text
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio) 稲谷, 祐宣(Inaya, Yusen)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.1 (1968. 6) ,p.87- 135
JaLC DOI	
Abstract	Among numerous editions of commentaries on Sango-shiki (三教指帰), which was one of the renowned works of Rev. Kukai (空海) in his youth, it has been unanimously accepted that the oldest existing MS should be Sangyd-kanchushd (三教勘注抄), stocked in the Library of Koyasan-Hojuin (高野山宝寿院). This MS is supposed to have been made sometime during the period between late Heian and early Kamakura. Our recent investigation, however, has come to a different conclusion. A copy stocked in the Library of Reiyukai (霊友会) is considered to be older than Sangyokanchusho. In spite of some technical limitations, being a mere fragmentary excerpt from certain older commentary, Reiyukai Book not only well illustrates the feature of the original text, but also keeps the Kana way of reading or pronunciation, which is vitally necessary for further advanced criticism. Besides, we are fortunately in a position to use the Introductory Chapter by the name of "Shikigo" (識語) written by Shoken (勝賢) of Daigoji Temple (醍醐寺). In the light of comparison with his Diary now stocked in the Tokyo National Museum Reiyukai Book including "Shikigo" can be considered Shoken's own hand writing. "Shikigo" tells us that the author of this commentary, which later became the source of the except, was "Atsumitsu". Basing on this description we have verified, through text-criticism, that he is "Fujiwara Atsumitsu (藤原敦光)". In addition to the Koyasan Edition, Sonkeikaku Library (尊経閣文庫) stores another copy of Ninnaji Temple (仁和寺). Comparison of these three issues, in our view, clarifies some aspects of the process of evolution of the Atsumitsu's Commetary. Reiyukai Book consisting of three volumes lacks Vol. III. However, its Appendix includes the parts which were eliminated in the Vol. I and II. It also supplies copies of Buddhist scriptures and of ancient dictionary, as well as of the chronological data of the Imperial House. Needless to say, these parts are indispensable as source material. Therefore, we, the co-authors, decided to publish the complete text of this Book in its original form (with the least possible emendations) for the convenience of the researchers interested in this field of study.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19680600-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平安末写三教指帰敦光注について

—— 解題と翻印 ——

太田次男
稲谷祐宣

筆者が三教指帰覚明注及び勘注抄の系統を調べていたとき、渡辺照宏氏のもとに勘注抄よりも更に古い写本のあることをたまたま知り、同氏にお尋ねした所、早速その本の写真を貸与せられ、また種々の便宜をも賜わつた。御説明によれば、氏と宮坂宥勝氏が岩波古典文学大系本三教指帰校訂のため蒐書せられた際に求め出されたものである。この本は勘注抄と同系のものであり、写しは平安末期を降らないものと思われ、平安末鎌倉初間写と思われる高野山宝寿院蔵三教指帰勘注抄と共に、三教指帰の注としてはわが国で最も古いもの一つであることは先ず間違いない。(尚、この本については「昭和卅九年三都連合展観入札目録」一〇番参照)

既に高野山大学の宮坂氏や同学御出身で在岡山の稲谷祐宣氏が研究に従事され、稲谷氏は既にこの注の系統上よりの論考を発表されたが、未だ全文の翻印と紹介にまでは及んでいない。この度、原本所蔵者及び渡辺氏の御好意により、稲谷氏と筆

平安末写三教指帰敦光注について

者との協同により、翻印を行うことになった。分担区分としては、解題の執筆は稲谷氏により、翻印原稿の作製は、巻中の分、及びその後の若干分を除いて稲谷氏の作業であり、筆者は巻中及び「御□□并膠筆等事」以下の原稿作製、ならびに翻印原稿全部を原本と照合して補訂し、巻末に諸本との校異を含む注を作製し、また、解題にも補正を加えた。従つて、内容上の責任は当然両者が同様に負うものである。

終りに臨み、この本の翻印に許可を与えられた所蔵者霊友会当局の方、種々御高配を賜つた渡辺氏に対し謝意を表す。

(太田次男)

空海作の三教指帰ははじめ聳誓指帰と題され、延暦十六年窮月始日の序文を有する自筆本が高野山金剛峰寺に所蔵されている。また、「続日本後紀」の承和二年三月の空海死去についての記事

(八七)

八七

には「三教論」とあるが、これは単なる異称に過ぎない。現在では一般に、聳警指帰が最初のものであり、それを再治したものが三教指帰であるとされている。それは、聳警指帰の筆致が、他の空海の作品に比較して、字勢があり、かなり異つている点などから、空海若年の作品と推定されるからである。(弘法大師真跡全集所収聳警指帰の解説、野本白雲氏。三教指帰講話、大西堯観氏。三教指帰講義、森寛紅氏など)この書は彼の二十四才の作品であり、いうまでもなく、日本漢文学史上、及び思想上において注目に値するものである。

三教指帰が空海の門下に、あるいはその法系者によつて如何に受け継がれたかということは平安時代においては明らかでないが、仁平四年に醍醐で写されたもの、あるいは平安末期の古写本、神護寺から観進寺へ、そして高野山光明院へと伝えられたものなどから、その法系者に読まれたことは明らかである。

さらに、中山法華経寺に所蔵される日蓮が少年時代所持し、武者の落書をした三教指帰の注釈書がある。伝記によると、日蓮は天台系統の清経寺で修行したといわれるが、彼が「求聞持法」を修したらしいので、この寺が天台系か否かということには問題があるが、ともかく、若年の頃テキストとして読まされたものというところが推定される。

また、高野板の最初の刊行は、三教指帰の建長五年のものである。高野版は、その需要に応じて逐時刊行されたものであつて、三教指帰が先ず取上げられたということは、やはりそれだけの意

味がある。尚、江戸時代では、真言の僧侶の勉学の第一歩として、三教指帰の素読が行われた。そこでは当然注釈書の存在が必要になつてくる。また真言の教理研究、祖書(空海の著作)研究の歴史について考えるならば、ここでも三教指帰の注釈について大きな分野が存在するのである。

空海の門下の著作は、長谷宝秀編『弘法大師諸弟子全集』に収められ、ままた偽作も含まれているが、そのほとんどは事相関係のものばかりであり、彼の法系者の著作も同様であると云つてよい。このことは真言の教理は空海によつて大成されていたということを実に示すとともに、本尊への祈禱によつて多くのことが期待される加持祈禱(事相)の分野が、その法系者のほとんどすべてであつたということがいえるのである。

次に空海の著作の注釈書についてみると、先ず藤原敦光が挙げられる。「真言宗全書解題」によると、秘蔵宝輪鈔と三教勘注抄があるとされる。この勘注抄を敦光作とする根拠は後に示すが、とにかく、真言宗全書編集にあつて、高野山宝寿院に所蔵されている、平安末鎌倉初間の写本「三教勘注抄」第一・第二が当時天下の一本と考えられて全書に収められた。ほゞ同時代の、外典をも多く引用する注としては、この外に覚明注があるが、普及の度合からすれば、江戸時代の智積院の運敵による「三教指帰注」が、新義派はむろん古義派をも通じてよまれ、また古義派では、通玄「三教指帰簡注」が広く流布した。運敵は自註の序に於て、敦光、覚明にも触れてはいるが、敦光のものなどは、一般的には

余り問題にされていなかったようである。これは宗派の教学研究が特定の注釈書によつていたという限界性を示している。

ところで本題に入るが、岩波、日本古典文学大系「三教指帰」の解説によつて初めて世に紹介されたこの本は小形枅形本。今の表紙は蓮花文様を織つた淡茶絹覆表紙、見返しには雲形文様、銀の切箔を撒く。綴葉装、両面書、一冊。料紙厚手楮紙、大きさは(16.7×14.9糎)字面高さ約15.7糎であり、写しは平安末を降らないものと思われ、また本文に附されている送仮名の字体からしても、院政期頃迄の特徴が示されている。内題、外題ともになく、覆表紙左肩に「三教指帰注^{敦光}」とある。内容は勘注抄などと同じく、三教指帰本文中より難語を抜き出し、それに対する内外典による用例と音義が示され、三教指帰巻上、中までで巻下には及んでいない。巻中が終つた次には、抄出もれのもの、及び、既に抄出されたものに更に補充が行われ、その次に雑記があり、「御□□并膠筆等事」という見出しで「蘇婆呼童子經」「金剛童子軌」「求聞持軌」「瑜祇經」「玉篇」「蘇悉地經疏」などが引用されている。これは「白氈」に対する用例を集めたものと思われるが、三教指帰注とは直接関係はない。ついで、文武から六条天皇(「当今……、治年二歳」とあるので仁安元年(一一六六)まで書かれていることになる。)までを、天皇の在位年代とその年号と年数で表示してある。この部分は肉太で異筆のようにも見えるが、後に触れるようにすべて一筆とみてよからう。鎌倉以前の古い注釈書として、従来、唯一本とされた勘注抄は三教指帰上巻分

平安末写三教指帰敦光注について

まで現存し、中巻以下を欠いているので、抄出とはいえ巻中まで含まれている点、この本には大きな価値があるといえる。

表紙裏には、

此注都有六卷敦光朝臣依宗観

上人勸注之云々予一見次少々抄

出之了為観初学人也

沙門勝賢

とあり、また、中巻了の次に、

注本一見□次

長元二年春三月上旬之比。聊鈔之

□^清 只為勸幼学也

更不可及外見穴賢々々

沙門勝賢

とある。これを文字通り読むと、敦光朝臣が宗観上人の勸によつて作つた三教指帰の注を、沙門勝賢が初学者の為に抄出したものとなり、その年代は長元二年春三月上旬であるという。

そこで、勝賢、宗観、敦光について検討すると、勝賢は藤原通憲の子である、有名な醍醐寺の勝賢であろう。安居院の澄憲や、明遍はいずれも兄弟であり、『血脈類集記』によれば、建久七年六月二十二日に五十九歳で没している。

次に敦光朝臣であるが、尊卑分脈によると、清和源氏流にも一人いるがここでは関係がない。とすれば、当然藤原明衡の子である文章博士の敦光が挙げられる。同じく尊卑分脈によれば、「天

養元四廿出家八十二、天養元年九月廿八日(十月廿九日薨八十三(イニ)とある。これによると、敦光の生存年代は康平四年(一〇六二)から天養元年(一一四四)となる。

宗観は尊卑分脈によると、藤原隆家の子良頼の曾孫宗兼の子であり、記事には「阿闍梨」とのみある。父宗兼が永治元年十二月(一一四一)に出家しているので、その生存年代は、これを手取りとしなければならぬ。また、『血脈類集記』第五(真言宗全書卅九所収)、実範大法師灌頂弟子の中にも宗観上人の名が見える。実範は藤原顕実の子で、生年は保安二年(一一二二)であるので、宗観もほぼ同時代とみてよからう。『新修往生伝』所収の敦光伝によれば、敦光の臨終時の善知識が中川聖(恐らく上人の一統であろう)であつたと見えるので、敦光と宗観の前記識語にみられる関係は充分考えられる。また勝賢の同胞が宗観と同じく実範の灌頂弟子の中に見えることからすれば、宗観と勝賢との関係も当然予想され、従つて、この注が宗観の勧めによつて敦光の手になつたという記事の信憑性も充分あるといえる。

さらに敦光は往生人として有名であり、『本朝無題詩』にも高野山の詩がある上に、子息顕豪は成就院寛助の子世豪の伝法であり、『血脈類集記』によると、

顕豪 律師。式部大輔敦光朝臣子。改明寛。寿永元年五月八日卒。

とあり、仁平四年四月二十九日、仁和寺心蓮院において付法している。これらのことから、敦光によって注が作られたことはごく自然に考えられる。

以上、敦光・宗観・勝賢の三人は無理なく結びつくのであるが、問題は、識語にある長元二年(一一〇二九)には、この三人ともまだ生れていないことである。

この矛盾について考える前に、この本の書写について触れる。これを、勝賢の建久二年自筆『祈雨法日記』一軸・東京国立博物館蔵本(巻末に成賢の伝領識語あり)と照合すると、勝賢の識語はいずれも自筆とみてよく、(醍醐寺蔵『水言鈔』表紙右下、勝賢自署とも一致する)本文も前述やや肉太の筆致をも含め、二本は酷似している。勝賢の自筆でないとしても、ごく近い者の筆といえよう。但し中巻の後に二葉程異筆と思われる箇所がある。

こういう前提に立つて、再び長元二年……の識語にもどる。この識語は写真にも示されているように、二年から下が稍肉太となり、最初にある長元は寧ろ細い。また二行目、上半はすり消されているが、消の上辺は二年の二と並ぶ。また、二年以下……勝賢までは一筆であるが、長元の二字は或いは後に書き加えられたものとも考えられる。但し、この二字が勝賢以外の人によるものは遽に断定し兼ねるし、「長元」も同じ時に書かれたものとする見解もありうる。

いずれにせよ、この二字は何らかの理由から誤書されたとみる外はなく、これに代るべきものを求めれば、勝賢の生存中の年号の中で「長」がつくものとしては長寛がある。ここで仮に長元を長寛二年とすれば、勝賢二十五歳の時であり、敦光の死後二十年に當つて時期的に無理はない。しかも、前述のように、巻末年代

の最後の、当今（六条天皇）の年号として書入れられている「永万」はまさにこの長寛のすぐ次に当る。以上のことから、筆者は私見として、この本は中巻まで長寛二年に書写され、以下増補分は、当今…二歳で筆がおかれていたので、六条天皇の二年目、仁安元年から同二年の間に書加えられたものと推定する。

この年代については、密教々理史の上から裏づけられる別の理由も存している。それは空海の著作（祖典）の研究が真言の法系者の中で行われた年代からの考察である。三教指帰の現存古写本の中で、訓点・識語などのある最古のものは、天理図書館蔵の仁平四年写久寿二年点（一一五五）のもの、平安末鎌倉初期という高野山光明院本の二つである。さらに範圍を広げて、三教指帰・性靈集の研究の年代をみても、性靈集の卷八・九・一〇の三巻を済暹が補つたのは承暦三年（一〇七九）が最古といわれている。従つて空海の祖典の研究は十一世紀の後半から、十二世紀に入つたころにはじまるといつてよい。空海の著作の注釈としては、この外にも、同じく済暹のものと言われる般若心経秘鍵開門訣と秘藏宝鑰顯実鈔の二つがあつたと伝えられているが、いずれも現存しない。又、敦光による秘藏宝鑰鈔「平安末」写本が大東急記念文庫に蔵され、これも今後の研究が期待される。

次にこの本を高野山宝寿院蔵三教勘注抄「平安末鎌倉初間」写本（活字本は参考程度にとゞめた）と、同じく尊経閣蔵（鎌倉初）写本と比較して、気がついたことに幾つか触れる。前述のように、筆跡の上からこの本が自筆の可能性をもつうえに、書写過程

平安末写三教指帰敦光注について

からみても、相応ずることが多い。

（三四ウ・5）
論語曰、子曰、片柳下惠為士師…（勘注抄、少し前に論語云、片言可以

折獄…の句がある。「ミ」はミセケチ

（六五ウ・3）
史記曰、秦始皇之時…求仙人也、又曰…

などのような写し違いも、単なる誤写ではなく、敦光注の要句を撰択しつつ書抜いた者のみが犯すという性質のものであり、勝賢筆写本の単純な書写からは全く起りえない誤である。また、かなり数多くみられる語順の誤（後に訂正）や誤字などにも、抄出操作時の生々しさがそのまゝの姿で残されている。

次に高野山本、尊経閣本とこの本との関係である。尊経閣本には書写者による異本との校合注が付されているし、高野山本より若干注が多い上に、高野山本には全くない裏書（これも本文筆者と同筆、前の論文で異筆としたのを訂正する。）も加わっている。勘注抄にもこの時既に異本が生じていたことが知られる。とすれば、勘注抄を直ちに敦光注そのものと見做してよいのか否か、従つて、勝賢が写した原本が即ち勘注抄であつたとは遽に断定し兼ねる。一オ・ウにある莊子よりの注文二句なども高野山本にはない。とはいえ、時代からみても、本文上からも、この三本が密接な関係にあることは明かであつて、それは、この三本に本文書写の際共通の誤りが屢々あることによつても知ることが出来る。

（四四ウ・3、4）
時天大寒、柳下思恐女子凍死、乃坐懷中以衣覆之、至於天曙暁而不為礼。

に於ける思↓惠、礼↓乱、という誤写、また、

(三一ウ・3)
伯英：後漢燉煌人也、人草書妙絶：

に於ける「人」なども三本の偶然の一致とは考え難い。外にもあるこういう例はすべて、卷末注に於て示したが、これらを考えれば、この三本の近親性は疑う余地はない。

では、この勝賢本は勘注抄二本のどちらにより近いのか。尊経閣本現存分は高野山本の約半分であつて、断定は避けることにするが、校比しうる範囲では、明かに勝賢本と尊経閣本の関係の方がより近いことが知られる。具体的には注に示したが、そういう資料になりうる三十三個所中、二十七個所で勝賢本は尊経閣本に一致し、残りの六個所中に於ても、厳密には五個所だけが高野山本に一致するに過ぎない。しかも語一字の相違ではなく、句そのものの有無についてみれば、勝賢本、尊経閣本には共にあつて高野山本にのみない場合はあつても、勝賢本、高野山本にあつて、尊経閣本にはないということは一例も見られない。更に、既に尊経閣本の欠巻の部分でも、勝賢本にあつて、高野山本にない句が数ヶ所みられるのである。従つて、現存分のみを校比からみれば、勝賢本は尊経閣本により近いといえよう。この尊経閣蔵本は仁和寺心蓮院の旧蔵本であり、前述敦光の子息顕豪と心蓮院との関係を考えれば、このことは自然に首肯せられるであらう。

更に、この三本を訓点の方からみると、高野山本には博士家のヲコト点が、尊経閣本には円堂点が夫々付されているが、読み方

自体からすれば、三本共極めて近い関係にある。しかし、

(勝) 枯樹重テ・栄・ユ (高) | (ハナサク) | (尊) | (ハナサク)

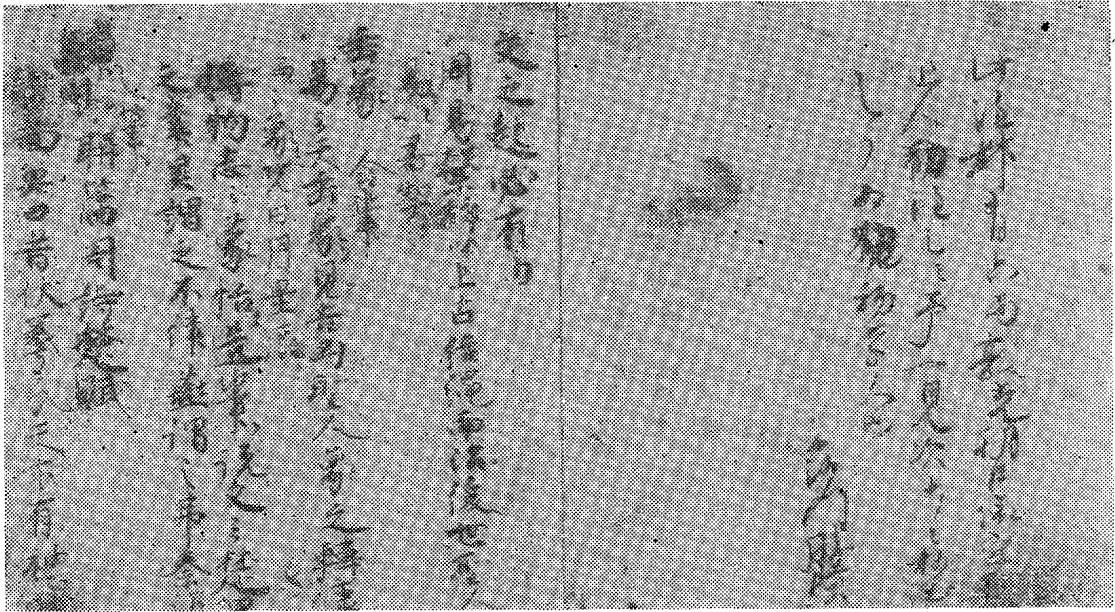
という程の相違はみられ、訓点の上から遠近関係をみることは現存分だけでは容易ではない。

最後にこの三本と覚明注との関係に触れる。成程、覚明注には三本と同じ注がかなりみられるが、同一注文の場合でも、句の長さの点や、順序、引用個所の相違などがかなり多い上、寛永刊本にはなく、慶応義塾図書館蔵慶長十五年写本に記載される二ヶ所(もう一ヶ所は刊本にもある)の「本注」の一つについてみれば、三本いずれにも引かれる晏子春秋の注文(刊本、引用なし)に対して、
本注^ハ无^ニ此文^ニ以^テ餘^ニ注^ス書^也、

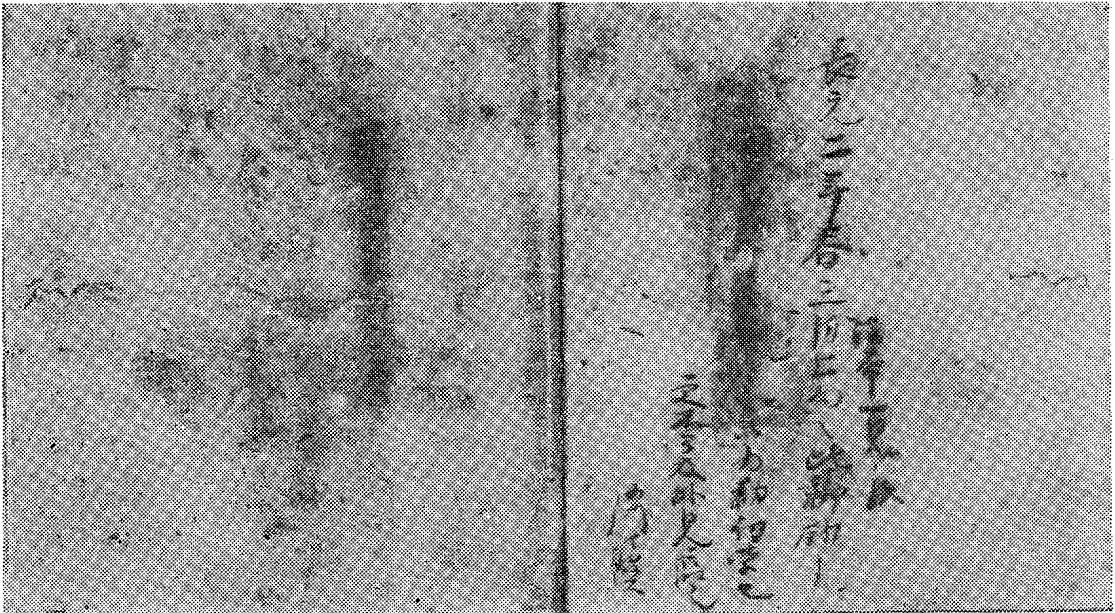
とあるのからすれば、これを後の書入とみない限り、ここでいう本注は敦光系のものとも思われないので、覚明注の系統については更に他注と比較しつつ検討せらるべきであらう。

これまで三教指帰注を敦光撰とする確たる根拠はなかつたが、勝賢本はその点について、新しい資料を提供したことになる、三教指帰注釈書研究史の上で意味がある。この本と勘注抄との関係については稲谷の「敦光注と伝える三教指帰注と三教勘注抄について」(印度学仏教学研究第十五卷ノ二)、及び太田の「釈信救とその著作について」(斯道文庫論集五)に於ても触れたが、いま、三教指帰注研究上の一資料として、また、諸種の資料としても、ここに勝賢抄出本の全文を翻印し、高野山・尊経閣両本との校合注を付して研究者に提供しようとするものである。

平安末写三教指帰敦光注について



卷 頭



中 卷 末 尾

(九三)

九三

凡 例

- 一、これは靈友会蔵三教指帰敦光注、勝賢抄出本の翻印である。注文は三教指帰本文の巻中まで、終るが、附載されている雜記類もすべて略さないで載せた。翻印に當つては次のような方針をとつた。
 - 一、出来る限り原本通りとし、振り仮名(ニ、ヲなど一字の送仮名を語の右真中に付することがあるが、區別してない)返り点(一、二、三、は左下ではなく、左中にあるので、現形通りにした)、声点なども、すべて忠実に表示することに勉めた。但し声点の位置は印刷上正確を期し難いので、本文に附すると共に、翻記したものを註として巻末に掲げた。
 - 一、異体字、略字、異体の仮名は印刷の都合上、支障のない限り通行の字体にあらため、特に問題のある場合は巻末注に於て説明を加えた。
 - 一、虫損その他諸種の事情により、文字の欠損している個所、及び判読できない場合は□を以て表わした。□の個所の右に()に入れて語を充てたのは、注文の原本を参照し、また、巻上では勘注抄、巻中では覚明注をも参照した。文字の痕跡とこれらの本との照合により、ほとゞ確実と思われる語は、()に括つてそのまゝ本文中に入れた。
 - 一、文字の痕跡などから推定の可能な場合には、該文字を〔 〕で囲み、解説に尙疑問の存するときには(カ)を傍記した。
- 一、見せ消ちには「止」「々」の二種類がある。これの施してある個所は、特に必要のない場合は除き、或いは訂正されたものを取つたが、誤写過程を知るなど、必要によりそのまま残した個所もある。
 - 一、明かに誤写と思われる語には、()に入れて正字を傍記した。また、誤の性質上、その必要のないような場合、或いは注にまつときも、そのまま残し、(ママ)と傍記した。
 - 一、転倒符(〃)の付された個所は、すべて訂正した。
 - 一、紙数の関係上なるべく改行を少なくした。従つて、三教指帰本文よりの摘語と注文とは、音義を除き、別行になつているが、摘語の下に二字分空けてその下に注文を続けた。また注文の改行の場合も、前行注文尾に「」を施し一字分空けて改行せずに続けた。毎葉表、裏末尾には「」を附した。
 - 一、原本にまゝ附された読点は「・」で示し、通読の便から私に附したものは、「」で示した。注文中にある「。」は、抄出者が敦光注々文を省略した個所に付されている。
 - 一、説明を要する個所、及び高野山本・尊経閣本との校異を一括して、注として巻末に附した。
 - 一、この本の翻印に許可を与えられた靈友会当局、また種々御高配を賜つた渡辺照宏氏を始め、貴重な図書閲覧に許可を与えられた、高野山宝寿院、尊経閣文庫、東京国立博物館、天理図書館に、また、種々御教示を賜つた山田忠雄、太田晶二郎、小松茂美、築島裕、頼惟勤の諸氏に夫々厚く御礼申上げる。

(表紙裏)
此注都有六卷敦光朝臣依宗觀／上人勸注之云、予一
見次少く抄出／之了為勸初学人也
沙門勝賢』^{1ウ}

文之起必有由 周易、繫辭曰、上古結繩而治、後世聖
人易以書契、

垂象 含筆 易云、天垂象見吉凶聖人象之、韓康(伯)。
云、象况日月星辰』 博物志云、蒙恬造筆、說文云、
楚謂之聿、吳謂之不律、燕謂之弗、秦謂之筆、

鱗卦聃篇周詩楚賦 竜魚凶曰、昔伏羲氏天下有神竜』^{2オ}

負凶出於黄河、法而効之、始画八卦、推陰陽之道、知

吉凶所在、謂之河凶』 史記曰、老子者楚苦県人、名

耳字聃、姓李氏、見周之衰乃遂著上下篇、言道德之言、

劉越石勸進表曰、宣王之興周詩以為休詠、又云、屈原

為楚懷王左徒、博聞強志明於治乱、閑於辞令。作懷

沙之賦』 蔡倫字敬仲、用樹膚麻頭及弊布魚網以為紙、

天下咸称蔡侯紙、

志学』 論語、子曰、吾十有五而志乎学』 爾雅云、母^{2ウ}

平安末写三教指帰敦光注について

之昆弟為舅、

伏膺 鈔曰、潜伏也、膺、胸也、

槐市 三輔黄图曰、元始四年起明堂為博士舍、但列槐

樹、諸生各持所出物經書、相与売買論儀槐市、

雪螢 繩維 孫氏世録曰、孫氏康家貧無油、常映雪読

書、晋書曰、車胤字武、博学、家貧不得油、

夏月則練囊』 数下螢、以照書以夜繼日』 楚国先賢伝^{3オ}

云、孫敬字文宝、恒閉戸書、以睡以繩繫頸懸之梁上』

戰策曰、蘇秦読書、欲睡引錐自其股、血流至踵、

成美論曰、為道(故)常勤精進、如鑽燧息則疾得火也、

惜響 之谷本無私情、有至則必^{3ウ}

答之以響、仏道於物無私矣、

輕肥流水 論語(云)、(乘)肥馬衣輕裘』 後漢書曰、

車如流水、馬如竜、

支離懸鶉 莊子曰、支離疏者、挫鍼治緝足以口、鼓

策(播)(精)足以食十人』 孫卿子曰、子夏貧若懸、

忠孝』 孝経云、身軀髮膚受父母、不敢毀傷孝之始

也、又云、以孝事君則忠、又云、君子事親孝、忠可

移於君、

飛沈異性 大戴禮曰、魚遊于水、鳥飛于雲、

教網三種 三教不齊論云、老聃入闕宣道德之妙旨、仲

尼放黜定禮樂於微言、未若尺尊經滿童宮化周百億、三教

於茲鬱起万人、是以同欽』造天地經曰、宝庇菩薩下

化生、此□□□伏羲、台祥菩薩号為女媧、廣□□□

葉名老子、童菩薩曰孔丘、

遊俠 陶染 孟康曰、同是非為俠』左思魏都賦曰、非

言厚行陶化染學、劉良曰、文帝寡言厚行陶染而□□學、

虛亡』司馬相如上林賦曰、乘虛亡与神俱、張揖曰、

老子注曰、虛無寥廓与無通』上林賦並託憑虛亡、是以

述邑居、

陳楯戟 □書孫卿子云、贈人以言重於珠玉、傷人以言

甚於劔戟、

憤懣莫早反煩悶也、

□陵頓首云、不得舒憤懣以曉左右』楚辭曰、惟憤懣以

胸云々』 5ウ

臘月 初學記云、漢以戌(日)為臘、魏以辰、晋以丑』

說文曰、臘冬(至)後祭百神也、

天姿辨捷 □雅曰、辨捷辨慧也、捷敏也、

魁悟 漢書注曰、ここ丘墟狀大□意也、張銑曰、ここ

猶大德、

九經三史 尺名、經徑也、言(如)徑路無所不通 6オ

白虎通曰、五經易尚書詩禮(樂)也、注曰、以易書詩禮

樂春秋為六經、至秦、皇焚書樂經亡、今以易書詩禮春秋為

五經、又禮有周禮儀禮と記、曰三禮、春秋有左氏公羊穀

梁三伝、与易書詩通數亦謂之九經』後漢書云、世以

史記班固漢書及東觀漢記為三史矣、後三國分方、魏吳

各有史官、蜀無其職、晋初陳寿採集事、謂之三國志』

張衡東京賦曰、三墳五典、左伝曰、楚子曰、左史倚相

能讀三墳五典八索九丘、賈逵曰、三墳三皇之書也、八

索素王之(法)、

曝骸反穴 張文成遊仙窟曰、白骨再穴、枯樹重榮』

劉琨勸進表曰、所謂生繁(華)於枯蕘、育豐肥於(朽)骨』

蘇秦晏平 史記曰、蘇秦者、東周雒陽人也、東事師於齊

而習之於鬼谷先生、遂游說諸侯顯名、其術長權變、連

六国從親、智有過人」又云、晏平仲嬰者萊之夷淮人也、事齊靈公莊公景公、既相齊、其在朝君語及之則危言、語不及則危行、國有道則順命、無道則衡命、以此三世顯名於諸侯』楊雄劇秦(美)新曰、礼官博士(卷)其舌而不談』史記曰、張儀者魏人也、始嘗与蘇秦俱事鬼谷先(生)學術。楚相亡璧、門下意張儀曰、盜相君璧、執張儀掠答數百、不服釈之、其妻曰、嘻子、毋讀書遊説、安得此辱乎、張儀謂其妻曰、視吾舌、尚在不、其妻咲曰、舌在也、儀曰足矣』晋書、郭象字子玄、少有才理、好老莊』能清言、大尉王衍每云、聰象語、如懸河瀉水注而不竭、
外甥左伝注、姊妹之子曰甥、所庚反、

王豹好謠 陳琳為曹洪与魏文帝書曰、過高唐者効王豹之謳、遊睢渙者学藻績(之)綵、李善曰、淳于髡曰、昔者王豹処淇(而)(西)河(善)謳、綿駒処高唐而斉右善歌』8ウ
縦之翫書 良史伝曰、文翁字縦之、廬江舒城人也、為蜀郡太守、仁愛供給、及率蜀人立廟作頌』漢書云、文翁廬江舒人也、好学通春秋、景帝末為蜀郡守、仁愛

平安末写三教指帰敦光注について

好教化、見蜀地僻陋有蛮夷風、文翁欲誘道之、修起学官於成都招下懸子弟、(以)(為)学官弟子、蜀地学於京師者比齊(魯)(焉)』
橘柚徒陽』周礼曰、橘踰淮北而為(枳)、氣然也』淮南子曰、夫橘樹之江北化為橙』晏子曰、晏聞、江南之橘生於淮北則為枳云、

曲蓬揉麻 潘岳河陽懸作詩曰、曲蓬何以直託身蓀麻、曾子曰、蓬生麻中不(扶)自直、
上智下愚 論語、子曰、上智与下愚不移』 9ウ
摘藻 班固答賓戲曰、摘藻如春花、韋昭曰、摘布也、勅施反、藻水草之有文者也』文選曰、振(古)占莫儔、注曰、振自也、

韋昭 元淑 韋弘嗣博奕論曰、今世之人多不務経術、好習博奕、廢事弃業、忘寢与食』吳志曰、韋曜字弘嗣、吳郡人也』少好学能属文、為太子中庶子、注曰、博者局(戲)也、奕者囲碁也 裴昭之曰、曜本(名)昭史、為晋諱改之、後漢書曰、趙壹字元淑、(漢)陽西懸人也、恃才倨傲、為鄉里所擯、作刺代疾邪賦以舒其怨憤、詞曰、

邪夫頭進直士幽藏、原斯瘼之攸興、寔執正(之)□□、

細素 誠子拾遺曰、(願)(細)「窺素」 楊雄書曰、費紬素四

尺」 李周翰(翰)曰、生素絹也、 10ウ

由砥助 尚書說命曰、若金用汝作礪、注曰、鉄須磨礪

以利器也、 人名也

盪滌 玉篇、滌徒朗反、滌徒歷反、洗也、除也、淨也、

蕩、揺動貌也」 說文云、滌器也」 11才

迷康 爾雅曰、五達謂之康、郭璞注曰、迷康所謂康莊

之衢也、

瞳矇 徒公反、 莊 文選抄、道也、

詩曰、矇矇有眸子而無見曰矇、

縈垂也、而髓反、(心)疑也、

円覆 礼記曰、博厚所(以)□□也、高明所以覆物也、

注曰、博厚配地、高明配(天)□□、 11ウ

喟(焉)張銑曰、々々歎声、

輾然勅忍反、

左思吳都賦曰、東吳王孫輾然而哈 劉淵林曰、輾大笑

貌也」 莊周曰、齊桓公輾而咲、

微管 拙蠡 莊子曰、以管窺天、以錐指地、不亦小乎」

東方朔答客難曰、窺天以蠡測海」 張銑曰、管竹也、蠡

蚌蛤也、言以竹管窺視(於)天、以蚌蛤以量其海水、其

滌貫文理終不可通發矣、 12才

梗概 文選鈔曰、々々壯弁之貌、又歎息也、

舌端 鮑昭擬古詩曰、両説窮舌端」 韓詩外伝曰、避文

士之筆端、避武士之鋒端、弁士之舌端」 12ウ

北海湛(智) 後漢書、鄭玄字康成、北海高蜜人也、粗

覽伝記至於(經)伝、洽熟稱為(純)儒、

匱求位反、竭也、乏也、 寔其矩反、寔無礼也、

筆謝除痾 魏志、陳琳字孔璋、善書檄。作檄之時曹公

病頭風、見琳檄遂愈、

詞非殺將」 史記、田单攻聊城歲余、士卒多死而聊城

不下、魯連乃為書、約之以矢以射城中、遺燕將書、燕將

見魯連書泣三日、猶与不能自決、歎曰、与人忍我寧

自忍、乃自殺、 (忍)

排(排)敷尾 憤(憤) 論語曰、不憤不啓不悱不發、鄭玄曰、

孔子与言必待其人心憤(憤)口悱(悱)、乃後啓發為説之、 シテ

擢揚』 淮南子注曰、楊擢粗略也、広雅曰、都凡也、

清濁剖判 河圖括地象曰、易有大極、是生兩儀、

未分、其氣混沌、清濁既分、仰者為天、偃者為地云々、

最靈 抱朴子曰、人之為物貴性最靈、

權輿 毛詩曰、于嗟乎不承權(輿)、毛萇伝曰、擢輿始也』

左思吳都賦曰、造化權輿』 爾雅云、とと始也、天地之

始(也)、

二儀 呂向云、二儀天地也、

劉幹 列異記曰、昔有神人、性劉名禹、字誇文、自言

有神力、身長一千七百丈、手執扶桑之枝、与日競走、

所棄鞭策及所執扶桑之枝、皆化林木、以其姓劉、因号

劉林也』

麟角 抱朴子曰、為者如牛毛、獲者如麟角、

操行如星 尚書洪範曰、庶人惟星、と有好風、星有好

雨、人心之不同、如星之不同』 左伝曰、鄭子産答子

皮曰、人心其不同如面、吾豈謂子面謂如吾面也、

如石投水並赴云々 運命論(二云)、張良受黄石之符(三)

之說、以遊於群雄、其言也如以水投石』 莫之受也、

及其遭漢祖、其言也如以石投水、莫之逆也、

鮑厘 張衡東京賦曰、人心是所學、体安所習、鮑肆不

知其臭、翫其所先入』 家語曰、孔子曰、与不善人居

如入鮑魚之肆、久而不聞其臭、亦与之化矣、

頭蝨 晉齒 嵇康養生論云、蝨処頭而黒、麝食栢而香、

頸処險而瘦、齒居晋而黄』 抱朴子曰、今頭蝨著身皆稍

變而白、身虱著頭皆漸鈍而黒、則是玄素果無定質、移

易在乎所漸也、

虎皮之文 楊子法言曰、羊質而虎(皮)、見草而悦、見豺而戰、

視肉之譏 莊子曰、人而不學謂之視肉、学而不行命之

曰撮囊、

戴盆』 司馬遷報任少卿書曰、僕以為戴盆何以望天、李

善曰、言人戴盆則不得望天、

楚璞 韓子曰、楚人卞和得玉璞楚山之下、獻之武王云

「礼記云、玉不琢不成器、人不学不知道、

蜀錦 譙周益州志云、成都織錦既成濯於江水、其文分

明勝於初成、他水濯之』 不如江水也、

照車器 史記、魏惠王会、田於郊、魏王問曰、王亦有宝

乎、威王曰、無有也、梁王曰、若寡人小国也、有徑寸之珠、照車前後十二乘者、

切磋 論語孔安国注曰、能貧而尚樂道富而好礼、能自切磋^(琢)瑋磨者也、

穿犀才 文選曹殖七啓曰、步光之劍、陸斷犀^(象)才

王褒聖主得賢臣頌曰、巧冶鑄干將^(粹)之璞、清水^(其鋒)其鋒、越砥斂其鏑、水斷蛟竜、陸刺犀象、

庸夫子 後漢書、胡広伯始南陽人也、六代祖剛值王莽居

攝、亡命交趾、広少孤貧、察孝廉試、以章奏為天下第一、
晉書恩倖伝論曰、胡広累世農夫、伯始致位公相、帝

王世記曰、堯取散宜氏女、曰女皇、生丹朱、又有庶子九人、皆不肖、
呂氏春秋曰、堯有子十人、不与其子而

授於舜、と有子九人、不与其子而授禹、
誠子拾遺曰、
蔡伯嗜誠子曰、貴賤無常唯人所速、苟善則庸夫之子

所至三公、苟不善、則王公之子反為凡庶、
木從繩直 尚書曰、惟木從繩則正、后從諫則聖、注曰、

木以繩直、君以諫明也、正義云、則曲木患直繩、負罪
怨明証、直繩者曲木所憎、公平者奸道之所怨、

前覆 後戒 晏子春秋曰、諺曰、前車覆後車戒、

龜鏡 雜書曰、靈龜者玄文五色、神靈之精也、上隆法

天、下平法地、能見存亡明於吉凶、
洪範五行曰、龜之言久也、千歲而靈、此禽獸而知吉凶者也、
劉琨勸進

表曰、前事之不忘後代之元龜也、

伶倫 呂氏春秋曰、黃帝令伶倫制十二箛聽風鳥之鳴以

列十二律云々、

離朱 淮南子曰、とと之明察箴末於百里之外、箴古針

字也、楊雄長楊賦曰、離婁燭千里之隅、
趙岐曰、古之明目者也、蓋黃帝時人也、

告面 礼記曰、夫為人子者、出必告、反必面、鄭氏注

曰、告面同耳、反言面者、行外来宜知親之顔色安否、

隱恤 張衡東京賦曰、勤恤民隱而除其害、
薩綜曰、隱痛也、胥病也、
国語祭公謀父曰、勤恤民隱而除其害、

鈔曰、恤憂也、言天子憂人之所痛、為其空苦也、
跋涉 左伝曰、子大叔曰、跋涉山川蒙犯霜露、以逞

君心、
草行曰跋、水行曰涉、後漢書云々、
山垵 爾雅曰、林外謂之垵、音決、吉營反、

18オ

19オ

18ウ

19ウ

釣罟網罟也、罟公戸反、楫即葉反、舟也、權直教反、与棹同、

溟海 十州記曰、蓬萊山外別有円海、謂之溟海、無風

而洪波百丈ナリ」

20オ

謔浪ハ咲敖云々、毛萇伝曰、戲謔不敬也、

州吁 史記、衛莊公有寵妾、生子州吁、ここ好兵、莊

公卒太子完立、是為恒公(桓)、ここ十六年弟州吁収フサメ聚亡

人以襲殺恒公、州吁自テ立為衛君、

20ウ

嗣宗 晋書、阮籍字嗣宗、性至孝、母終与人ニハ困ニ基、对

者求止、籍留与决賭訖、既而飲酒二升、拳声テ一テ号吐血

数升、

水鏡 冰霜 晋書、樂広字彦輔、比之水鏡、見之瑩然若

披雲ハ霧ハ而觀青天ハ」時務策曰、清若冰霜、令宋人而

退玉ハ、貪如谿壑、謁鄭伯ニ而求環、

貪婪ハ無厭食也、

鯨鯢 其雄曰鯨、其雌曰鯢 崔豹古今注云、

醕酏 莫迥反、都挺反、

若蝸若蟻 毛詩、文王曰、咨ハ女殷商、如蝸、如蟻、如沸

如羹ハ、注曰、蝸蟻也、蟻蟻也」箋曰、飲酒号呼之声如

21オ

蝸蟻之鳴カ、其咲語沓ト、又如湯之沸羹フキノ之方熟然也、

草葉誠 花嚴經第卅五云、乃至草葉不与不取」 21ウ

麻子 瑠玉集云、麻子曰、普天之下莫非王土、率土之

民莫非王臣、雖不食我周粟、然食我周粟モ、何異哉、於

是伯夷叔齊不食七日、俱餓死也、

蓬頭ハと如蓬之乱也、

毛詩曰、首如飛蓬、

春馬 夏犬 洞玄子曰、考覈交接之勢、不出世法其中(有)

春驢秋狗之勢」

倡樓 (抄)(音) □□眇云々、

誠子拾遺云、朝遊酒肆、暮宿倡樓 漢書注、師古曰、

倡樂人也、

龜兔 張衡西京賦曰、ここ聯ハ豚、注曰、龜、狡兔也、龜

音讒、劉良曰、老兔也、

提觴捕蟹 晋書、畢卓字茂世、新蔡銅陽人也、大興末為

吏部郎、常飲酒癡職。」卓常謂人曰、得酒滿數百斛、船

四時、甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船

中、使之畢一生矣、

22ウ

一百青鳧 千宝搜神記曰、南方虫其形若蟬而大、其子著草葉如蠶種、得子以婦則母飛來(就)之、殺其母以塗其子、以其子塗其母、用錢貨市(旋)則自還、故淮南子術以之還錢、名曰青鳧』 晉書曰、阮脩字宣子、常步行以百錢掛杖頭、至酒店便独酣暢、雖当世富貴而不顧、

四銖

貧女之一燈、見阿闍世王授决經、作名須弥燈光、世界无日月、人民身中皆有大光明也、

漢書第四曰、孝文皇帝春二月地震、夏四月除盜鑄錢令、更造四銖錢、

過庭 提撕毛詩也、

論語曰、陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎、对曰未也、嘗独立、鯉趨而過』庭、曰学□□、对曰未也、不(学)詩無以言也、鯉(趨)退(詩)学□□、他日□□独立、鯉趨□□過庭、曰、学礼□□□□也、不学礼無□□立(也)、鯉退□□学礼、鯉孔子之子名也、

諄々 之純反、 吕延济、諄々衆言也、

猶子 礼記壇弓曰、昆弟之子猶己子、

十韻銘 崔瑗座右銘曰、無道人之短、無說』無說己之長云々、

三總之誠 孔子家語曰、孔子觀周□□入大祖后禋之廟、堂右階之□□有金人焉、參緘其口、而銘其背曰、古

之慎言人也、戒(之)哉、無多(言)、と多敗、無多事、と多□、安樂必誠、無行所悔、勿□何傷、其禍將長、勿謂何傷其禍將長、勿謂何害、其禍』將大、勿謂不聞、

神同人、 論語曰、子張問明、子曰、浸□之譖、膚□之慙、不行焉、可謂明也已矣』 鄭玄曰、譖人之言如水之浸

(潤)以□成人之禍也、 鑠骨金 鄒陽上書曰、衆口(鑠)(金)□□□□、賈逵

曰、鑠銷(也)』 樞機 周易曰、言行君子樞機□□ 王弼曰、樞制動之

主也、 辱而蜀反、□辱也、又汚也、

禹筆 司馬相如子虛賦、禹不能名、契不能名、(計)

張揖曰、禹為堯司空、弁九州名山別草木、契為堯司徒、

(數)五教率万事、

隸算 張衡西京賦曰、伯益不能名、隸首不能紀、張銑

曰、隸首黃帝時算人、

滋味 豚徒昆反、矧失忍反、

莊子曰、声色滋味之於人心、不待學而樂、

不預豫親族 礼記云、謂從七世祖父母已來所有眷屬咸

名親族」史記、武王有疾不預、

嘗藥 礼記云、君有疾飲藥、臣先嘗之、親有疾飲藥、

子先嘗之、注云、嘗度其所堪也、

側目 漢書、列侯宋室見邪側目、李周幹曰、側目言懼也、

寒心 宋玉高唐賦曰、孤子寡婦寒心酸鼻」鈔曰、(寒)

心謂戰慄也、

鸚猩 礼記曰、嬰母能言不離飛鳥、牲之能言不離禽

獸、今人而無礼雖能言不亦禽獸心乎、

流血 礼記云、高柴泣血三年、其至意矣、泣而無聲、

如血流、故云泣血也、

平安末写三教指帰敦光注について

出瓮 瓦器、又作盆、爾雅云、盆謂缶、

後漢書曰、郭巨家貧養老母、妻生一子、三歲母減食与

之、巨謂妻曰、貧乏不能供給、共汝遂欲埋子、子

可(再)有母不可再得、妻掘穴二尺余、(得)黃金一釜、上

文云、天賜孝子郭巨、

抽笋 楚國先賢伝曰、孟宗母嘗笋、及母亡冬節將至、

笋尚未生、宗入竹哀歎之、而笋為之出。得以共祭、至

孝之盛也、

躍魚 孝子伝曰、王延母勅延求魚不得、伏之泣血、

延叩頭於水而哭、有一魚躍、長五尺、或曰王祥也、

孟丁 孫盛逸人伝曰、丁蘭者河内人也、少喪考妣、不

及供養、乃刻木為人、髣髴親形事之。殺張叔云々、

蒸々 尚書曰、虞舜克諧以孝、

折檻 漢書、朱雲字子遊、魯(人)(也)、賜尚方斬馬之

劍、断(佞)(臣)一(人)(頭)殿檻折。以旌直臣、

左將軍辛(慶)忌(叩)(頭)帝乃解当治

壞疎 檻(帝)(目)、(勿)以(海)(之)、

苑曰、師經鼓琴、魏文侯起舞曰、使我言而無敢見違、

師經・授琴而撞、文侯不中、と疏潰之、文侯顧左右曰、
為人臣而撞其君罪何如、左右曰、罪当烹、使捉師經下
堂一等、(師)經曰、臣可得一言而死乎、文侯曰「可、師
經曰、昔堯舜之為君・唯恐言而人不違、桀紂之為君・
恐言而之拒之、臣撞桀紂、非撞吾君也、文侯曰、ユルシツ釈之、
是寡人之過、懸琴於壁不補疏、以為寡人之過、

出肝 呂氏春秋曰、衛懿公有臣、曰弘寅、寅讀曰呼天而

号、テ尽哀而止、臣請為禳因自殺、先出其腹内懿公之肝、
(桓)恒公聞之曰、弘寅可謂忠矣、 29オ

割心 史記、比干曰、為人臣者不得以死争、テ廼・強

諫紂怒曰、吾聞・聖人心有九竅、割比干觀其心、
玉篇、々五各反、正直之言、
李周翰曰、々中正貌也、

史記、趙簡子曰、予聞千羊之皮不如一孤之腋、(狐)諸大夫
徒聞唯々不聞周舍之諤々、 29ウ

東海 後漢書、苞咸字子良、住東海立精舍授、建武中入

授皇太子論語、又為其章句、

西河 史記曰、(ト)下商字子夏、居西河為魏文侯師、慎子

曰、臣下閉口左右結舌、

涉獵 師古曰、涉若涉水、獵若獵獸、言歴覽之不專
精也、 30オ

南楚 宋玉好色賦曰、玉為(人)体貌閑麗、口多微詞。

南楚(窮)巷之(妾)焉足為大王言乎、イロシニ

西蜀 玉褒・字子淵、得賢臣頌曰、今臣僻在西蜀(生)

窮巷之中、漢書曰、玉褒有軼才、上及微褒為聖主得

賢臣頌、 30ウ

揖讓 揖、說文曰、攘也、手著胸曰、(入)伊反、讓人
又進也、

拯反、退讓也、

鷗翔虎臥之字 蕭子良古今篆隸文体曰、其字有鸞鳳飛

翔之書、梁大夫内司馬季暹注千字文序曰、鍾繇千字

書、如雲鵠遊飛群鴻戲海、王羲之書、字勢雄如竜、跳淵

門虎臥鳳閣、 31オ

鍾張 王歐 琚玉集曰、鍾繇字元常、魏時潁川長社人也、(秋)

位至大傳善能楷篆、又云、伯英姓張名芝字伯英、後漢

煌人也、人草書妙絕、韋誕謂之草聖、下筆必為楷法、南

齊書、張融善草書云々、誠子拾遺曰、鍾張真草之迹念並

心、又云、王獻之姓王名獻之字子敬、父羲之字逸(留) 31ウ

少、晋時瑯琊人也、父子並能書、時人莫有及者、後代皆稱之曰神筆」唐書曰、歐陽詢字信本、潭州臨湘人也。

詢初倣王羲之書。不挾紙筆、皆得如志通、自矜重、以狸毛為筆、覆以兔毫管皆象犀、非是未嘗書、

落鳥 哭猿

淮南子曰、日中有跋鳥、注曰、跋趾也、謂三(尾)鳥也」32オ

又云、堯時十日並出草木焦枯、堯命羿仰射、十日中其九

鳥皆死墮羽翼、又曰、養由基楚人也、善射、去楊葉於百

步射之、百發百中、楚慕王獵見一白猿、左右射之能無

中、猿繞樹枝避箭、王命養由撫(恭)弦、抱樹而啼者也、

更蒲

戰國策曰、更羸与魏王处、有雁」從東方来、更羸

虚發而雁下」列子詹何曰、臣聞、蒲且子之弋、弱弓32ウ

微繳垂風振之、連雙鶴於青雲、用心專也、

張良

史記、留侯張々者其先韓人也。高祖起將運籌於

帷帳之中、決勝於千里之外、

孫子

又云、孫武者齊人也、以兵法見」於吳王闔廬、

々々曰、子之十三篇、吾尽觀之矣、

稼穡

尚書洪範曰、土爰稼穡、孔安国曰、種為稼、斂曰33オ

穡、土可以種可以斂、

陶朱猗頓

史記、范蠡之ユクトキニ陶為朱。乃治産積十九年、

間三致千金」孔叅子曰、猗頓魚之窮士也、耕則」常飢33ウ

桑則常寒、聞朱公富往而問術焉、朱公告之曰、子欲速富

当畜五特、乃適西河大畜牛羊千猗氏之南、其滋息不可

計、以興富於猗氏、故猗頓也、

九穀

周礼云、三農生九穀、鄭玄云、九穀稷黍稗稻麻(稷)

大小豆大麥、小敷

莅政力至反、臨也、亦作泣」34オ

四智 東觀漢記曰、揚震字伯起、弘農美陰人也、為東

萊大守。昌一邑一令・王一蜜是故震所举秀才也、密夜懷

金与震。密曰、夜暮無人知之、震曰、天知神知子知我

知、已有有四知、何謂無知也、遂辞不受也、

三黜

論語曰、子曰、柳下惠為士師而三黜」直道而事人34ウ

焉往(而)不三黜、枉道以事人、何必去父母之邦、

折獄者

論語云、片言可以折獄者其由也与、

孟母

列女伝云、孟母舍近墓、孟子嬉戲為墓間之事、孟

母曰、此非所以居处(子)也、乃舍市旁、其子嬉戲為買

術、孟母又曰、此非所以居处子也、乃舍学官之傍、其

遊乃設領豆揖(讓)□(讓)進退、孟母曰、此真可以居子矣、(遂)□(遂)居、及孟子長學六芸卒成大儒之名、35オ

孝威 范曄後漢書、台佟字孝威魏郡鄴人(也)、隱(於)

(武)安山鑿穴為居、采藥自業。遂去隱迹終身不見、

伯夷 許由 史記、伯夷叔齊孤竹之子也、皇甫謐高35ウ

士伝云、許由字武仲、陽城槐里人也、脩道沖虛、堯35ウ

舜二帝皆師而學事焉云々、

換心洗胃 時務策曰、扁鵲換心華他洗胃、史記云、扁36オ

鵲者勃海郡鄆人也、姓秦氏名越人、得長桑君禁方為医、

後漢書、華他字元化沛国譙人也、晚養性之術精於方藥、

斲蠅飛鳶 莊子曰、莊子送葬過惠子之墓、謂從者野曰、

人聖慢其鼻端若蠅翼、使匠石斲之、匠石運斤成風斲之、

尽聖而鼻不傷、淮南子曰、魯般以木為鳶而飛(之)、

日慎 大公金遺曰、日慎一日、壽終無殃也、

孜々 切々 尚書、禹曰、予(思)日孜々孔安国曰思自滋々不怠奉臣功而已、

吐握 縹囊(呂)□向曰、縹青白色、

囊有袋也、用以盛書、

王褒聖主得賢臣頌曰、周公躬吐握之勞、周公旦之36ウ

子、封伯禽於魯、

素鉛 大宰碑表曰、人蓄酸素、家懷鉛筆、李周翰曰、(翰)

油素絹也、鉛粉筆也、所以理書也、

造次急遽也 顛沛僵仆也、雖急遽僵仆不違於仁也、

論語云、君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必37オ

於是、

摧五鹿角 漢書曰、五鹿字充宗、用權当而朱雲有口弁

莫能折者、曾抱首請論難、連拄五鹿君、ととと不能

答、諸(備)□為之語曰、五鹿嶽々、朱雲折其角(也)、

重五十筵 東觀漢記曰、戴馮字次仲、坐五十余席、正

旦朝賀帝会群臣諸生能說經者、更相難治、義有通者輒37ウ

奪其席、以益通者、馮遂重也、

彬々 論語曰、文質彬々、苞氏曰、彬々、文質相(半)

之貌也、

(孫)馬 晉書、孫綽字興公、大原人也、世説云、孫

綽作天台賦、范榮期(目)、卿試擲置地要作金玉之声、

後漢書曰、馬融字季長扶風茂陵人。有俊才、38オ

楊班 陸善経曰、楊班、楊雄班固也、漢書、楊と字子

雲蜀郡成都人也、少而好学博覽無所不見」後漢書、

班固字孟堅、年九歲能屬文、九流百家之言無不窮究、

離騷 漢書、淮南王安為人好讀書鼓琴、武帝令作離騷

賦、且受詔食時便」上、 38ウ

賦鸚鵡 彌衡(禰)曰、黃祖太子射賓客大会、有獻鸚鵡

鵡者、こゝ為賦筆不停綴、文不加点、

翹と車乘 左伝云、翹々車乘文、杜預曰、翹と遠貌、

接軻 漢書、陣平陽武戸牖人也、(家)(貧)□□好學、負郭窮

巷、以席為門、然門外多(長)者車轍、後為丞相也」 39オ

蔑と王帛 周易曰、六五賁于丘園、束帛蔑と」王肅

曰、こゝ委積貌也、

塵直速反市塵也、

魏侯之輅 洛故反、大車也、 呂氏春秋曰、段干木者魏文侯敬之、

過其廬而拭。寡人光乎勢干木光乎(德)、寡人富乎財干

木富乎義、勢不如德尊財不如義高」吾安敢不軾乎、 39ウ

扣角 三略記曰、甯戚・飯牛於車下、候桓公出叩牛角

而歌曰、南山粲と白石爛と、生不逢堯与舜禪、短布衣

適至軒、從昏・飯牛至夜半、夜半漫と何時旦、桓公

平安末写三教指帰敦光注について

召与語悦之、以為大夫也、

周王輦 史記曰、大公望呂尚者東海上人、周西伯」獵

果遇大公於渭水之陽。載与俱帰立為(師)、 40オ

草廬 後漢書周燮伝曰、有先人草廬結于崗畔下云、

彈鋏 史記、馮驩聞之孟嘗君好客躡蹻而見之、彈其劍

而歌曰、長鋏帰来乎、食無魚、孟と遷之幸舎、食」有

魚矣、後彈劍而歌曰、長鋏帰来、出入無輿、孟と遷

之代舎、出入乘輿車矣、

僥倖玉篇、僥魚彫反、倖胡耿反、求也、

礼記、孔子曰、小人行險以徼幸僥与徼同也、

台鼎 天文志曰、在人曰三公、在天曰三台」易曰、鼎

折足覆公餗也」環濟要略曰、三公者象鼎(三)(足)□□共承 41オ

其上也、

槐棘 周礼、左九棘、孤卿大(夫)□位焉、右九棘、公侯伯

子男位焉、三槐三公位焉」注曰、樹棘以為位者、(取)

其赤心而外刺、(槐)□之言懷、來人於此、

青紫地芥 漢書、夏侯勝字長公、少孤好學、徵為博士

光祿大夫、始每講授」常謂諸生曰、士病不明經、術

苟明其取青紫、如俛フシテヒロフ拾地芥耳、

干将 吳越春秋曰、干将者吳人造劍二枚、一曰干将、

二曰莫耶、

丹墀 漢典職儀曰、尚書省中以丹漆地、故称丹墀』42才

萬機 孔安国曰、機微也、言当戒懼万事之微也』孝經

曰、德教加於百姓、刑於四海、

四海 爾雅曰、九夷八狄七戎六蠻、謂之四海、

後囊(裔) 尚書曰、德垂後裔』 孔安国曰、立加於當時

德レ沢垂及後』世、裔末也、

天上牽牛 曹植九詠注曰、牽牛為夫織女為婦、織女牽

牛之星各処河之旁、七月七日得一會、

水中鴛鴦 呂延濟曰、合歡被以取同觀之意也、

雌雄未嘗相離、人得其一則其一思而死、故謂之疋鳥、

詩有七梅之歎』 毛詩曰、標有梅男女及時也、邵南之

園被文王之化男女得以及時也、標有梅其美七号、注曰、

興也、標落也、盛極則墮落者梅也、尚在時七也 箋曰、

興者論梅実尚有余七也、未落論始衰也、謂女年廿春盛

而不嫁至憂夏則衰也』

43ウ

書有貽二女之媚 尚書曰、帝曰、女于時觀厥刑于二女、

釐降二女于嬪(納)嬪于虞』 孔安国曰、女妻也、刑法也、

堯於(是)以二女妻舜觀其法度、接二女以治家觀治國』

又云、嬪婦也、舜為匹夫、能以義理下帝女之心、於所

居嬪水之納(納)、使行婦道於虞氏也』

44才

展季 張衡西京賦曰、展季桑門誰能不宮』 類林曰、柳

下惠字展禽魯人、独止宿於郭門下、須臾有一女子又至、

便与共宿、時天大寒、柳下思恐女子凍死、乃坐懷中以

衣覆之、至於天曙曉而不為礼、

伉儷』 李周翰曰、伉儷夫婦也、

44ウ

子登 晉書、孫登子公和汲郡共人、無家屬、時人於汲

泉北山土窟中得之、見之親樂之夏則編草為裳、冬則被

髮自覆、好讚易鼓琴、

(隻)之石反一也、 說文曰、特、佳特一佳為隻、二隻曰雙、

姬氏』 毛詩曰、何彼穠矣、(美)(王)吳□姬也、雖王姬亦下嫁

於諸侯、何彼穠矣』 毛萇傳、武王之女文王之孫適齊

侯之子、文王(姓)姬氏也、

姜族 杜預曰、逸詩也、姬姜大國之女、蕉華(萃)陋賤之人也

轟、火宏反 左思蜀都賦曰、車馬雷駭轟、^(闕)圓、劉良、轟、車馬聲也、 45ウ

隱、車聲也、

羈、李善曰、羈賊衆走之貌也、^(駭)、鈔曰、馬行也、

霈艾、劉良、々々馬行曰也、^(貌)沛普外反、艾我大反、

袂幕 左思魏都賦曰、馮軾拊馬袖幕紛半、陸善經曰、袖幕紛半、言拳袖成幕者紛多雜半、 46オ

徒御駕肩 鮑昭蕪城賦曰、當昔全盛之時、車挂轉人駕肩、杜預左伝注曰、駕凌也、張銑口、^(目)駕猶倚也、

汗霖 左思吳都賦曰、揮袖風颺而紅塵、^(目)昼昏、流汗霖、霖而中達泥濘、呂向曰、言汗流於地而道路有泥濘、霖霖小雨、言汗似之、 46ウ

紫蓋 文選曰、紫蓋纒以連翩、又云、冠蓋如雲、又華蓋承辰、鈔曰、言蓋高乃上接於天也、

尽訝迎礼 礼記注云、御當為訝、^(目)迎、毛萇伝曰、^(目)嫁、於諸侯送訝皆百乘也、 47オ

媵送義 媵以証反 送女、^(目)從、嫁也、

(同)牢同尊 儀礼昏礼曰、壻執鴈而入、再拜奠鴈、^(目)鷺出

平安末写三教指帰敦光注について

御婦車、授綏輪三周共牢而食、合卷而酌、

合卷合体 鄭氏三礼曰、卷受四舛取瓠、^(目)中破之各一、 47ウ

口、卷居隱反、玉篇曰、卷以瓢為酒器、婚礼用之、

鳳儀 竜躡 尚書曰、簫韶九成鳳凰來儀、孔安国曰、儀有容儀也、^(目)嵇康字叔夜、長七尺八寸、好容色雖土木形骸不自飾而竜帝鳳姿天質自然、^(目)、^(容)、^(神)、^(賦)、^(白)、^(宛)

若遊竜向、^(目)、^(神)、^(女)之躡媚如、 48オ

琴瑟 毛詩曰、窈窕淑女琴瑟友之、

膝漆 古詩云、以膝投漆中誰能別離此、^(膠)陸善經、膠漆一合不可分離、^(膠)喩夫婦恩之深固、

偕老 毛詩曰、執子之手与子偕老、^(目)注曰、偕俱也、^(目) 48ウ

東鰈 吳都賦曰、雙則比目片則王余、^(目)爾雅云、東方有比目魚焉、不比不行、其名謂之鰈、郭氏曰、

壯如牛脾、細鱗、紫黑色、一眼兩片相合乃行、

悝 苦回反、病也、憂也、一曰悲也、

同穴 毛詩云、^(目)則異室死則同穴、^(目)毛萇伝曰、穀生也、生在於室則外、^(目)、^(異)、^(トキ)、^(テ)死則神合同而為一、 49オ

南鵝 東海之魚名曰鰈、比目而行、南方有鳥名曰兼、比

翼飛矣」爾雅曰、南方有比翼鳥焉、不比不飛、其名謂之鵲音兼似鳧青赤色、一目一翼相得乃飛、

九族 尚書曰、克明後德以親九族、

速(召)也』

八珍 九醞於運反、郭璞遊仙詩曰、王孫列八珍」張

衡南都賦曰、酒則九醞甘醴、

嘉肴 毛詩曰、爾酒既旨、爾肴既嘉嘉旨皆美也、

羽觴 西京賦曰、羽觴行而無算」漢書音義曰、羽觴、

作生爵形、

滿白」吳都賦曰、里讌巷飲飛觴飛白」劉達曰、白(大)

白、爵爵之名也」謂有(連)令者舉大白以罰之、

如環 潘岳西征賦曰、若脩環之無賜、

八音 金石絲竹匏土草木(革)、孔安國傳也、

言婦 南都賦曰、客醉言婦、主稱露未」晞」毛50ウ

詩云、擊鼓咽と醉言婦、又云、湛々露斯匪陽不晞、厭

と夜飲不醉無婦、

投二轄 漢書、陳遵字孟公、嘗大會賓客、宴飲恐客去、

乃脫車轄投於井中、

途露 毛詩曰、厭挹行露豈不夙夜行多露」51オ

舞蹈 毛詩序曰、不知手之舞足之蹈、フマムコトヲ

賞盤 毛詩曰、考槃在澗考成也、槃樂也、

事親之孝云、孝經曰、孝始於事親、中於事君、終於

立身」孔安國口、人生至于卅則事父母接兄弟、卅以往51ウ

所謂中也」又云、立身行道揚名於後世、以顯父母之孝

之終也」耕也餒在其中云々、論語文也、

紳骨紳(大)帶也、

唯と鄭玄云、々々スルニ、應辟也、

雀變為蛤 礼記、季秋之月爵入大(水)為蛤」鄭玄曰、大

水海也」又云、仲春之月鷹化為(鳩)」52オ

(葛)公白飯 (神)仙伝云、葛仙公、名玄一名甫字孝元、(先)

丹揚勾客人也、從左元放受九丹金液仙經、玄方与客对

食、(即)(吐)口(中)飯、尽成大飛蜂數百頭、玄乃張口

見蜂飛還入(口)中、52ウ

左慈」同伝云、左慈字元放廬江人也、乃学道術曹公、憎

惡之遂欲殺之、乃勅外牧慈、乃走入群羊中、追者見至

入羊中、其疑化為羊、愁不能分別之云々、

乞漿得酒云、張文成遊仙窟曰、乞漿得酒旧來神口、

打兔得麀非意所望、

聞詩聞礼』 論語曰、陳亢退喜而問一得三、聞詩聞礼、^{53オ}

又聞君子之遠其子也、

充終身之口実 班固兩郡賦云、既聞正道、請終身而誦

之』 尚書云、予恐來世以台為口実、

已上上卷了』

虛亡隱士亡音無、

詳愚淪智 論語曰、子曰、甯武子邦有道則智、邦無道

則愚。其智可及也、其愚不可及也 孔安国曰、詳、愚

似実故也、

和光 孝子経曰、和光同塵、

濫一縷之袍』 揚子方言曰、南楚人貧衣一被醜一弊、謂之藍

縷或謂之□□或謂之縷裂』 史記曰、我先王熊一釋辟在荆

山葦露藍縷、服虔曰、言衣弊一壞、其縷藍一然也、

董威輦 神仙伝曰、ここ不知何許人、晋武(末)在洛

陽白社中、寢息土、藍縷衣不蔽形、恒吞一石子経曰

不食。莫知所終、

平安末写三教指帰敦光注について

傲然慢也、倨也、傲五到反、

箕踞 礼記曰、毋箕、注、為其不敬也』 漢書、高祖ここ

罵『罵甚慢』 師古曰、ここ者謂申兩脚、其形如箕也、

莞爾』 論語注曰、ここ少笑貌也、^{55オ}

睨眄 張銑曰、ここ張目貌也、

吁々 况于反、歎也、

投藥 抱(朴子)曰、以鉄器消鉛、以散藥投即成銀、又

消此銀、以他藥投中、又成黄金、

千金裘』 史記曰、孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下^{55ウ}

無雙、

寸步之蛇 心地観経云、耽著世樂墮八難、故如七步蛇、

若害人時毒力熾盛、出過七步即使命終、

鼯音精 駒音俱 李巡爾雅曰、ここ一名奚鼠^{ケイ}アマクチ

膏肓宋韵、百勞反、脂也、呼光反、心上隔下也』^{56オ}

孫子荆書曰、治膏肓者必進苦口之藥』 左氏伝曰、晋景

公夢疾 為一堅子一日居膏之上膏之下若我何』 元命包

曰、膏者神之液也、又沢也、肥也、

(一一一) 一一一

腫脚 毛詩曰、既微且腫毛萇曰、 胛傷曰微、腫足為腫、

新修本草云、諺言、俗无良医、枉死者半、拙医療病

不若不療』

56ウ

有颯 慙貌也、

啓沃 尚書說命曰、啓乃心沃朕心、

春雷 礼記月令曰、仲春之月雷乃發声、始電、蟄虫

咸動啓戸始出、

嚇陸法言云、吁格反、又作嚇、

莊子曰、至陰肅至陽赫、

礪 於謹反 雷声、 莊子曰、瞽者以与乎文章之觀、聾

者無以与乎鍾鼓之声、

太上秘録 金録簡文經云、太上太道君受高皇之号、居

太上之任、

大玄真一本際經曰、無宗無上而独能為万物之始、故

名元運道一切、為極尊而常処二清出諸天上、故

称天尊、

歡曰悦反、飲也 血遺盟、

57ウ

周礼、司盟掌盟載之法、鄭玄曰、載盟辞書其辞於策、

殺牲取其血坎其牲、加書於上而葬之、

短綆宋韵、綆吉杏反、井索也、

莊子曰、楮小者不可以懷大、綆短者不可以汲淵、抱

朴子曰、何異以一尋之綆汲百刃之深、不覺所用之短

而云井之無水也、

測潮 又云、人以指測海、指極而云水尽者也、

秘櫃泉底 又云、或之曰、此道至重必以授、苟非其人

雖積金如山勿以此道告之、

漢帝冀仙 漢武内伝曰、漢武帝好長生之術、求道七月

七日帝宮掖之内、設座殿上紫羅席地、燭百和之香張

紫雲之幃、燃九光燈設王門之棗蒲陶之酒、帝乃

盛服立於階下、内外謐寂以俟仙宮、中有簫鼓之声人

馬之響、食頃王母至也、或駕竜虎、或乘白鹿、或乘白

麟、或乘白鶴、同執采施之節』

王母 列仙伝云、西王母者神人、蓬髮、虎

爪豹尾、善嘯穴居、名王母在崑崙山、

長房 後漢書、費長房者汝南人也、曾為市掾、市中

58ウ

59オ

有老翁壳ウレ(藥)、懸一壺於肆頭及市罷翁(輒)跳フコ(入)壺中、

市人莫之見、唯長房(於)上觀異ニルヲ(焉)鳥、因往再拜奉

酒脯、翁知長房之竟其神也、翁乃与俱入壺中、唯見玉

堂巖麗旨酒甘肴盈衍其中、共飲畢而出云々、
59ウ

邂逅 毛詩曰、邂逅相遇適我願号(合) 毛萇伝、と云

不期而自会スルン、

邴原 魏志、邴原字根矩、北海朱虚人也、時務策云、

邴原尋師躡屣 涉於千里、
60オ

彭祖 列仙伝曰、と殷大夫也、名鏗帝頸之玄孫陸終

氏之中子也、歴夏而至商末号七百歳、抱朴子曰、黄

山公記曰、彭祖去後七十余年、門人於流沙之西見之、

非死明也、
スト云ホ

稽顙 類蘇朗反、長楊賦云、稽樹頷、張銑曰、類額

也、稽顙手至額也、
60ウ

築壇約誓 抱朴子曰、余師鄭君者、予從祖仙公之弟

子也、又於從祖受之、乃於馬迹山中立壇盟受之、

不死之神術 服石論曰、凡服丹先首於吉日、清且具服

嚴飭淨嘯其口面向東、立再拜一心發願、願服神藥已後
61オ

平安末写三教指帰敦光注について

千殃散滅、百病消除、志長生無違其願、

蜉蝣 郭璞遊仙詩曰、蜉蝣輩寧知龜鶴年、大戴礼云、

蜉蝣也朝生而暮死、

跛驢 布火反、跛足也、
61ウ

抱朴子内扁之序曰、欲戢勁翮於鵠之群、藏逸迹

於跛驢之伍、

応竜 広雅曰、有鱗曰蛟竜、有翼曰応竜、有角曰虬竜、

八仙 神仙伝曰、漢淮南王劉安高帝之孫、作内書十一

篇、又有中篇八卷、言神仙黄白之事、名為鴻宝萬畢三

卷、論變化之道、外書甚衆、凡數十萬言、於是八公乃

往、八公初詣鬢負皓素、門吏先密以聞、安使門吏自

以意難問之、言畢八公皆化成十五童子、色如桃花、

抱朴子曰、彭祖之弟子青烏公、黒穴公、秀眉公、白兔

子、離婁公、大足君、不暈来子、七八人皆歴代数百、
62ウ

歳、在殷而各仙去、

三嶼之銀虛(合) 史記封禪書曰、齊宣王燕昭王使人求蓬萊

方丈瀛州云々、漢書、三神山者、黄金白銀為宮闕、未至

望之如雲、木華海賦曰、覲安期於蓬萊、鈔曰、蓬萊山

名、在東海中、上有金銀台、神仙之所聚也』 63オ

五鬻之金闕 列子曰、渤海之東有大豁、其中有山、一

曰岱輦、二曰円嶠、三曰方壺、四曰瀛州、五曰蓬萊、

其上台觀皆金玉、仙聖一夕飛相往来、

大鈞 陶甄居延反、察也、

賈誼服鳥賦曰、大鈞播物号、块坻無限、服虎曰、

鈞即陶一家所軋者、陶者作器於鈞上、此以造化為大鈞』 63ウ

洪鑪鎔鑄 張茂先答何劭詩曰、洪鈞陶萬類、張晏曰、

陶家名摸一印、一軋為鈞、以其能制器及大小比之天也』

服鳥賦曰、天地為鑪、万物為銅、

松喬 列仙伝曰、赤松子者神農時雨師也、服水玉教神

農、□(二云)、王子喬者周□王太子晋也』 64オ

項顔 史記、顔回字子淵、年廿九髮尽白、蚤死、孔子曰、

有顔迴者不幸短命死矣』又云、甘羅曰、大項囊生七

歲為孔子師』顔氏曰、項託。顔回之短折、伯夷原憲

之凍餒、

養生(之)方』 養生要集云、劉居安曰、食生吐死可以長

存、謂鼻内氣為生、吐氣為死、凡人不能服氣、從朝至

暮、常習不息修而舒之、

大綱 洛神賦曰、陳交接之大綱』 漢書曰、王以為夫

婦人倫大綱、

秦始皇 史記曰、秦始皇之時齊人徐市等上書言、海中

有三神山、名曰蓬萊方丈』 瀛州、仙人居之、謂得齊

戒与僮男女求之、於是遣徐市發男女數千人、入海求仙

人』也、又曰、

鏗鏘行烈貌、又威儀容止美貌』 抱朴子云、仙法欲寂靜

無為忘其形骸、而人君撞千石之鐘伐雷(霆)之鼓、碎。

磻磻。而驚魂蕩心、百妓万變、喪精塞耳、(飛)輕走』 65ウ

迅鈞 潛戈高、

燦爛 上倉旦反 潔一好鱗明、

紅臉朱脣 神女賦曰、朱脣的其若丹、

臥屍 抱朴子曰、仙法欲愛逮蠱蠕不害食氣、而人君赫

斯之怒芟。夷之誅黃鉞一揮齊斧暫』 授、流血涌隍伏

尸千里、断斬之刑不絶於市』 春秋元命苞曰、積骨成

山流、血成淵、

泄以尾閭司馬彪曰、尾閭水之從海水出也、

莊子、海峽(若)曰、天下之水莫大於海、万川歸之而不盈、尾闾漑之而不虛、

方底』宋玉九弁曰、マトナルアナアリケ方鑿而方ナレフクアリ柄号、吾固知、其

鉏。鋸。而難入、

樂太而帝 漢書曰、樂成侯登上書言樂太、天子見太

悦、太曰、臣之師曰、不死之藥可得、仙人可致也、仍拜太

為五利將軍 兩都賦曰、騁文成之丕 誕馳五利之所

刑』抱朴子曰、秦始皇求之不獲、少君樂太為之無

驗故也、彼二君而臣自可学(而)不得、或始勤而卒怠、

或不遭乎明師、又何足以定天下之無仙乎、

糟糠作曹反慈恩云、米糲也、簸已無実、

無致後毀耳 史記云、女無面諛退而謗』 67ウ

豸 切韻蟲豸、爾雅、有足曰蟲、無足曰豸』 韋昭曰、

蟻子也』 神仙伝曰、陳安世稟性慈仁、行見鳥獸常下

道避之、不欲驚之、不踐生蟲未嘗殺物、 68オ

精唾 養生要集曰、神仙凶云、禁無施精』命夭没、禁無咳

唾失肥(汁)』 漢武内伝云、西王母曰、久不在人間(笑)為

臭濁』 養性志曰、莫遠視とと損目』 抱朴子曰、養生

平安末写三教指帰敦光注について

之方、睡不遠、行不疾歩、耳不(極)聽、目不久視、坐不

疲、臥不及疲』 養生論云、滋味前其(府)藏、醴醪』 68ウ

鬻其腸胃、香芳腐其骨髓、喜怒悖其正氣、思慮消其

精神、哀樂殃其平粹、

克孝克信 抱朴子曰、求仙者要当以忠孝、和順仁信

為本、

蹶 玉篇、渠月居月居衛三反、說文、偃也、一曰跳、

薑芥』 爾雅曰、芥草也、張揖子虛賦注曰、薑与蒂同

並丑介反』 北山移文曰、芥千金而不眴、履万乘

其如脱』 文選曰、眴カセイニスル。眴ノアクハ、カリ。芥、

脱躐 淮南子曰、堯年衰志闕天下而(之)舜、猶却行而

脱屣』 孟子注曰、屣草履也』 69ウ

織腰 後漢書、楚王好細腰宮中多餓死』 墨子曰、楚靈

王好細腰而国多餓』 抱朴子曰、有道者視爵位如湯(鑊)

俗人尤所翫好云々、

抱朴子曰、常人之所愛乃上士之所憎也、庸俗之所貴

乃至人之所賤也、 70オ

得仙 釈名曰、老不死曰(仙)、遷也、遷入(山)故制字人

傍山也、

五穀者腐腑 養生論曰、神農曰、上藥養命中藥養性者

而世人不察、唯五穀是見、声色是耽、目惑玄曠、耳務

淫哇、養生要集云、五穀、粳米甘、麻酸、大豆醎、

小豆苦、黄黍辛 70ウ

五辛 梵網經云、大蒜草葱慈葱蘭葱興渠、是五種不得

食 雜阿含云、一者木葱二者草葱三者蒜四者興渠五

蘭葱、

醴醪 養生論曰、こゝと煮腸胃云々、

豚魚 □途昆反 周易曰、豚魚吉、信及豚魚 鈔曰、 71オ

豚魚獸之微者也、魚者虫之隱者也、

伐命之斧玉篇、方禹反、刀斧也、

枚叔七發曰、皓齒娥眉命曰伐性之斧 呂氏春秋曰、

靡。曼皓齒鄭衛之音、務以自樂、命曰伐性之斧、

鉞于月反、斧也、亦作戣 71ウ

千金方曰、養生之道、莫久行久立久臥久坐久聽久視、莫

大歡、莫跳踉、皆損壽命、若能不犯則長生也、

大笑大喜云々、 呂氏春秋曰、大喜大怒大憂大悲大(哀)

五者接神則生害矣、

鳩除禁反 玉篇云、毒鳥食蛇、羽畫酒飲之即死 72オ

離此於俗尤難 抱朴子曰、或問儒道之業孰為(難)易、

答曰、儒者易中之難、道者難中之易也、夫棄交遊委妻

子謝榮名捐祿位、割。燦爛於其目、抑鏗鏘於其耳、括。

愉。靜退獨善于己、謗來不感譽集不喜觀貴不欲居賤

不恥、此道家之難也、出無慶弔之礼、入無施贍之情、

不勞神於七經、不運思於律曆、不為推步苦心、不為

藝文役、衆煩既損和氣自益、無為無慮不怵不惕、此道

家之易也、所謂難中之易(也)、

白朮 本草經、白朮味苦甘温無毒 □止汗除熱消食。作

煎餌久服輕身延年不飢 抱朴子、白朮一名山精、故

神(農) □藥經 曰、必欲長生常服山精、 73オ

黄精 本草曰、こゝと味甘平無毒、主補中益氣除風滋安

五藏、久服輕身延(年)不飢、

松脂 又云、こゝと味苦甘温無毒、癰疽惡瘡頭瘍白(禿)

疥(瘡)風(氣)安五藏除熱胃中伏(熱)咽乾消渴。久服 □

身不老、一名松膏、一名松(肪)、 73ウ

穀実(穀)一名柠実 又云、とと味甘寒無毒、主陰。痿水腫、

一穀実所在有之、八月九月採実曰乾。和丹用亦乾服、

使人通神見鬼、注曰、此即今穀樹子也、仙方、採搗(取)

汗(汗)、

蓬矢 孝經孔安國注(云)、桑弧蓬(矢)以射天(地)方(四)74オ

葦戟 抱朴子曰、以白(葦)為鈔刺(之即吉)山中鬼來喚人

求食、不止者投之即死、山中鬼常迷(惡)道(使)

徑者(以)葦杖(打之即死)、

神符 本草經云、道者乃以(子)可以(久)、可以(治)、可以(平)、

可以昭形、可以却(邪)、可以安(人)、可以為吉、可以知

賢、可以遠(通)、(可)可以(安)、若此為神(親)74ウ

符「莊子曰、善養生者若牧羊者然視其後者而鞭。

豹魯有。單、養其内、而虎食其外殼張也、養其外而病

攻其内、

呼吸 嵇康云、呼(コ)吸吐納養身、

扣天門 孝子(老)曰、天門開闔、河上公注曰、天門(75オ)謂北

極紫宮、開闔謂終始五際也、治身、天門謂鼻(孔)、開謂

喘息、闔謂呼吸也、

平安末写三教指帰敦光注について

醴泉 養生要集云、老子尹氏内解曰、唾者湊為醴泉、

漿為玉漿、流為華池、散為精液、降為甘露、故口為華

池、中有醴泉、嘔而咽之、漑藏潤身流和百脈、化養万

神支(支)節毛髮宗之而生也、 75ウ

草芝肉芝 抱朴子曰、五芝石と木と草と穴と菌と、

伏苓 威僖 本草曰、松脂淪地千歲化為(木)、

其上有(小)狀似蓮葉、名威僖、夜視有光、持(甚)

之其滑、燒之不焦、帶之避兵、延年益寿通(也)神明、 76オ

億蒲拜反病、

竜驤 史記曰、造父以善御幸於周穆王、とと得。驥(温)

驪。驪驪耳之駟、西巡狩樂而忘歸、張衡西京賦、

吞刀吐火雲霧。杳冥。西京雜記云、東海黃公立(云)興

雲霧、 76ウ

合門陵空 抱朴子曰、神(藥)則則可以(成)舉家(皆)仙、

不但一身、

一銖 本草經云、古秤(唯)有銖兩而無分名、今則以十

黍為一銖、六銖為一分、四分為一兩、十六兩為一斤、

吞符食氣 抱朴子曰、食穀者而不寿、食氣者神明不

(一一七) 一一七

77オ

死、此皆行氣者一家之偏說耳」^ハ後漢書、費長房汝南人也。壺公為作一符曰、以此主地上鬼神也、

縮地 蒙求、長房縮地、

改形改髮 漢武內伝曰、一年易氣、二年易血、三年易

脈、四年易穴、五年易髓、六年易筋、七(年)(易)(骨)、

八年易髮、九年易形、□(と)變化、とと則道、とと則

液為(仙)人^(カ)

死籍數削 金遺録曰、神仙長生不死不老、方服方七後食

服之、百日欲見鬼神、三百日司命折去死籍」又云、

黃帝所受真人中黃直、黃帝曰、今棄天下之□□聞長

生之道、

躡倒景^{78オ} 抱朴子曰、果能登虛 躡影雲輦」漢書志曰、

登霞^{テニサカサマ} 倒 影^ハ如淳曰、在日月之上、日月反從下照、

故其影到也、

儻^{78ウ} 爾羊反 徘徊也、

八極 淮南子曰、八紘之外乃有八極、高誘曰、八極ハ

方之極也」張景詩曰、雲根臨八極^{78ウ}

九空 爾雅曰、中央曰鈞天、東方曰蒼(天)、南方曰炎

天、西方曰昊天、北方曰玄天、東南方曰陽天、西南曰

朱天、西北曰愍天、東北^(文カ)變天、謂之九空 東北落歟、

放曠 秋興賦云、放曠人間之世^ニ 呂延濟曰、々々謂

赤鳥之城 穆天子伝曰、天子至于赤鳥。山是^{79オ}天下之

良山也、宝玉之所在、嘉穀生之、草木碩美也、

紫微 列子曰、周穆王時西域国有化人來、王執化人之

祛騰而上天、暨化人之宮 構以金銀、絡以珠玉、出雲

雨之上、宝為清都紫微也、

織女機上 荆楚歲時記曰、張騫尋河源得□石^{79ウ}、示東

方朔、と曰、此是天上織女支機上、

姮娥 淮南子曰、^{ケイ音} 昇請不死之藥於西王母、恒娥竊

而奔月、許慎曰、恒娥旻妻也、奔入月中為月精、盖詹

上夫人是□、

帝軒 張衡思玄賦曰、会帝軒之未帰」列仙伝曰、黃

帝者号曰軒轅、採^{78オ}首山之(銅)鑄於荆山下、鼎成有竜

乘湖鬢下迎黃帝、とと乃乘之、群臣百僚悉持竜鬢、

王喬 又云、とと者周靈王太子晉也、

莊鵬之牀 莊子曰、北溟有魚其名為鯤、と大不幾千里

也、化而為鳥、其名為鵬、怒而飛、其翼若垂天之雲矣』
淮吹(犬) 神仙伝云、淮南王劉安(劉)。雞犬舐之皆得飛昇(ト)、故80ウ
鷄鳴雲中犬吠天上、

烈馬之厩 晋書天文志云、房四星曰天駟、為天馬主車
駕、南星曰左驂(服)、次左(服)、次右服、次右驂、亦曰天厩、
牽牛宿 博物志曰、旧説曰、天河与(海)通』 嚴君平等81オ
事也、

惓惓無欲 陸老玄小經云、夫字物以声以響、道寂然無
声、漠然無元、廓然无(景)、寥然無聞、冥然無像也云々、
与天地以長存 屈平九章曰、与天地号比寿、与日月号(令)
齊光』81ウ

靈宝之密術 神仙伝云、淮南王劉安篤好儒学、兼該テカネタリ
占候方術、作内書廿一篇、又有中篇八卷、言神仙黄白
之事、名鴻宝万畢三卷、論变化之道』 広弘明集曰、後
漢時、張陵造靈宝經及章醮等道書廿四卷、
浮雲富』 論語云、不義而富且貴、於我如浮雲、82オ

塗炭 文選鈔云、乱世之民、如陷泥塗陷火炭也』 尚書
曰、有夏昏德民墜塗炭』 呂向曰、々々如布炭火於地

平安未写三教指帰敦光注について

而不避也、

卿相 後漢書曰、莊周之幼冥号、辞卿相之頭(位)、82ウ
鼠上之猫 礼記曰、古之君(子)□□□□□□□□□□猫為
其食田鼠、
(使)(之)(必)(親)(之)(迎)

鷹□□雀 左伝□□、見不仁者誅之如鷹鷂之逐鳥□□、
草上露 搜神□□□□(挽)歌者喪□□□□(家)(之)(執)沸者相□□83オ
和之声也、挽歌詞有薤露蒿里二章出田横門人、横□殺(自)

門人(傷)(之)為之悲歌、言人如薤上露易晞滅也』 亦
謂人死魂精歸於蒿里、故有二章』 潘岳西征賦曰、危
冬葉之待霜履虎尾而不噬』83ウ

鸚鵡類 陳琳檄吳將校部曲文云、鸚鵡之鳥巢於葦。若
と折子破、下愚之惑也、

鸚音寧 鸚音古穴反、
鸚摩之魄 呂氏春秋曰、陳有醜人皤。皤其為貌也、推(推)
類垂目豎長』 脛黃(頸)黑面、と足以駭人、言足以84オ
喪国也、陳侯悅之任政之、

子都之好 毛詩曰、山有扶蘇、刺忽也、所美非美然也、
不見子都乃見。狂且、毛萇伝曰、子都世之美好者也、狂

醜人也、且辞也」箋云、人之好美色、不往視子都」反
往見狂醜之人、是興(忽)好善不任賢者反任用小人其
意同也、
84ウ

方壺 洞冥記云、元封元年(起)方壺(山)像招諸靈異
名、東方朔謀於秘備燒天下異香、有沈水香祇(精)香薰肥
香明庚香」金碑(香)口、
85オ

薰薷 左伝曰、一薰一薷、十年尚猶有臭、杜預曰、薰香
草、薷(臭)草也、十年有臭、言善易消惡難除也、
85ウ

斯文 論語曰、文王既没文不在茲乎、(天)將喪斯文
也、後死者不得与於斯文也、
86オ

中卷了』

注本一見口次

長元二年春三月上旬之比。聊鈔之

只為勸幼学也

更不可及外見穴賢々々

沙門勝賢』

86ウ
87オ

朝市 張(儼)口曰、争名於朝、争利者於(市)口、今三川周室

天下之朝市、

誰能係風 漢書曰、武帝好鬼神、谷永(說)口曰、神仙不
死之藥若將取求之、蕩々如絲風捕影、終不可得、
肆筵 毛詩曰、肆筵設席授几有緝御(毛萇伝云、肆陳也、
設席重席也)』
87ウ

狼心 左伝令尹子文曰、諺曰、狼子野心、
親戚有病 孝經曰、孝子之事親也、居則到其敬、養則
到其樂、疾則到其憂、
88オ

狎侮父兄 尚書曰、狎侮君子罔以尽人心、
汪々萬頃 後漢書曰、黃憲字叔度汝南人也、郭林字
云、叔度汪々如万頃之陂、澄之不清、撓之不濁、
押紙(朱別筆)
(汪々萬頃森々千仞
此一句注釈、第三卷之中也、進而交入于此歟)

森々千仞 晋書曰、庚(庚)數。字子嵩、長不滿七尺而腰帶
十围、温嶠奏之、數更器(嶠)、目嶠森々如千丈松、雖
礪(トシテ)何多節』施之大廈有棟梁之(用)口、
88ウ

狂(巨)王 哲(智)列 韓子曰、心不能審得失之端則謂之狂、
反(反) 隔州里 語林曰、楊修字德祖、為魏王曹操簿主、至江

87オ

南詔曹娥碑、と上有八字、詞云、黃絹幼婦外孫壻曰、

操不解問德祖曰、卿知否、德祖曰知、操曰、且勿言待

孤思之、行三十里得之、遂令德解、德祖曰、色絲絕

○、(幼)婦小女字、外孫好字、壻○受辛辭字也』 89才

戴淵 晉書曰、戴淵字若思広陵人也、名犯高祖諱。陸

機薦之趙王倫、若思有公輔之才、

周処 又云、とと字子隱、少孤、未弱冠旅力絶(人)、

好馳騁田獵不修細行(人)云々、

溪壑 國語曰、叔魯生其母觀曰(魚) 叔魚晉大夫叔嚮(異カ) 母弟羊舌鮒也、是虎

目而豕喙、鳶肩而豺腹、溪(壑)可盈滿、是不可厭也、

○以賄死、叔嚮(之)母(聞)其号也、乃還曰、豺狼之声也、

滅羊舌氏之家者必是子也、

咀嚼才削反、

喫 苦擊反、 噉 徒敢反、 食也、 噉 食也、

木華海賦曰、魚則橫海之鯨、茹鱗甲吞竜舟、

己穴 見梵網經之中、

猩 山海經云、如豕而人面(異カ) 交趾封谿有(志) 90才

(猩)々、夜聞其声如小(啼)啼、

平安末写三教指帰敦光注について

術婆伽大論有之、

礼記月令曰、季春之月、是月也、(乃)合累牛騰馬、遊牝

于牧(注)曰、是時所合牛馬謂繫在廐者也、

老猿 雜宝藏經有之。難陀因緣歟、

彌猴 戸侯反、

武移反、

玉篇曰』

出肝 呂氏春秋曰、衛懿公有臣曰弘。寅胤翟人攻衛、

其民曰、君之所与禄位者鶴也、所貴富者宮人也、君使

宮人与鶴戰、余焉能戰、遂潰而去、翟人至及懿公於棠

沢殺之、尽食其肉、独捨其肝、弘寅至報使於肝畢』莊

子曰、惠子曰、莊子来欲代子(相) 於是惠子恐搜於國中

三日三夜、莊子往』見之曰、南方有鳥名曰鸕鷀、子知

之乎、夫鸕鷀發南海而飛至北海、非梧桐不止、非竹實

不食、非醴泉不飲、於是鸕鷀得腐鼠、鸕鷀遇之仰天而視

之曰、味(カ)今子欲以子梁国味我耶』

莊子曰、善養生者若牧羊者、然視(モ)其後者而鞭、魯有

單豹者、巖居而水飲、不与民共利、行年七十而猶(有) 91ウ

嬰兒之色、不幸遇餓虎、殺而食之、有張毅者、高門懸薄無不趨也、行年卅而有內熱之病以死、豹養其內而虎食其外、毅養其外而病政其內、

白金黃金 抱朴子曰、神仙經、黃白之方廿五卷千有余首、黃者金也、白者銀也、又曰、共玄山中有丹沙、其下多有金也、且夫作金成則為真物中表、如一百練不減、故其方曰可以為釘、明其堅勁也、此則得天地自然之道、

神丹 又曰、第三丹名神丹、服一刀圭百日仙也、第六之丹名練、服之十日仙也、服石論曰、服丹以淨水嚥、含一棗核許蜜、次且以一二丸服之、若有所覺觸者至他日又漸增之、(以)微覺觸度、本草經曰、服藥不可多食生、胡蘆生菜、又云、服(藥)不可食諸滑物菓菜、又云、服藥不可多食肥膾犬穴肥美及魚膠、

王喬 列仙伝曰、玉喬者周靈王太子晉也、道人浮丘公接比嵩高、(山)廿、(山)廿、後求之於山上見之曰、告我家、七月七日待我於、(纒)氏山頭、果乘白鶴駐山頭、93オ牽牛渚 博物志曰、旧説曰、天河与海通、近世有人居

海渚者、每年八月有浮查来至甚大、往反不失期、此人多賣粮食乘查而去、忽亦不覺昼夜、奄至一処、有城柳屋舍、望室中多見織婦、見一丈夫牽牛渚、次飲之、驚問、此人何由至此、人即問、為何処、答曰、君可至詣蜀問嚴君平、此人還問君平、曰、曰、某年某月有客星犯牽牛、即此人之到天河、

筆笏 礼、貴賤皆執笏音忽、天子以球音求、諸使象牙、大夫文竹、士竹長尺有六闊三寸、有事則摺笏於腰帶、所謂紳之上也、

九族 父 祖父 曾祖 高祖 己身 子 孫 曾孫 玄孫、

五經 七經 加公羊穀梁 九經 加周礼義礼 十一經 加論語孝經 十三經 加老子莊子、

御 并膠筆等事

蘇婆呼 經上卷云 其所画物応用白氎細柔密緻匠

者織成両頭存縷勿令割截闊幅无未曾經用先須淨洗復香水灑所画綵色不応和膠置於新器牛毛為筆文 陸香安悉香計和

三、用重

金剛童子軌云〔大正藏卷二十一・一〇九・上〕或白氈或素上或板上云

求聞持軌〔云〕絹素白氈淨板云

〔大正藏卷十八・二五六・下〕

瑜祇經云淨白素縹云々

已上

氈徒協反慈恩云切韻云細毛布也今謂不然別有氈花織以為布今白氈是也毛作者褐是也已上仲算說

玉篇云氈徒叶〔切〕氈之延切毛布也氈上氈毛為席

白氈〔白〕以之織〔諸儀〕

順和名云

陶隱居〔一〕名杜仲〔一〕名木綿杜音度和名波比末由美折之多白絲者也

毳蔣飭切韻云毳他敢反此間名如字毛席以五色絲為之

氈野王曰氈諸延反和名賀毛毛席撚毛為席也已上和名

〔大正藏卷十八、同經卷中・七六四・中〕

瞿醯經云其子送繩。而用白氈及麻等作云蘇悉地經〔云〕等之記同

〔日本藏、密教部章疏下、同經略疏卷四〕

蘇悉地經疏云広聚經云此索不得用蟹唯得用白氈及藕絲

云々〔云〕用五色之財躰而氈以毛不織〔云〕

文武十一 大宝三年 慶雲四

元明七年 是和同

元正九年 靈龜二 養老七

平安末写三教指帰敦光注について

95ウ

聖武廿五 神龜五 天平廿

孝謙十年 天平勝宝八 天平宝字二

廢帝六年 猶宝字

称徳五年 天平神護二 神護景雲三

光仁十二宝〔龜〕十一 天応一

桓武廿四 〔是〕延暦

平城四年是大同

嵯峨十四純弘仁

淳和十季 是天長

仁明十七 承和十四 嘉祥〔〕年

文徳八年承和 仁寿三 齊衡三年 天安二

清和十八純貞觀

陽成八年是元慶

光孝三年 仁和三

宇多十年 仁和猶一 寛平九

醍醐卅三 昌泰三 延喜廿二 延長八年

朱雀十六 承平七年 天慶九

邑上廿一 天曆十年 天徳四 応和三年 康保四

96才

96ウ

97才

98才

97ウ

冷泉二年 是安和

円融十五 天禄三 天延三年 貞元二
天元五年 永観二

花山二年 是寛和

一条廿五 永延二年 永祚一 正暦五年
長徳四 長保五年 寛弘八

三条五年 是長和

後一廿 寛仁四年 治安三
万寿四年 長元九

後朱九年 長暦 長久四年
寛徳

後冷廿三 永承七年 天喜五
康平七年 治暦四

後三四年 延久四

白河十四 延久猶 承保 承 承 承 承
永保 〔応〕〔徳〕各三

堀河廿一 寛治七年 嘉保二 永長一
承徳二 康和五 長治二 嘉承二

鳥羽十六 嘉承猶二 天仁二 天永三
永久五 元永二年 保安四

新院十七 保安猶二 天治二 大治五年
天承一 長承三年 保延六

近衛十五 永治一年 康治二 天養一
久安六一 仁平三一 久寿二

当院 治三 年 久寿尚一 保元二年

二条院 治八年 保元尚一 平治一年
永暦一年 応保二
長寛二年 永万元

98ウ

当今

永万元一乙酉七月廿八日即
帝□治年二歳

100才

註(声点)

- 2才1平・平 同3平・平・入 同4平・平 2ウ2上・平
- 同4入・去・平 6才3去 16才7平 23ウ10入 24才
- 6去濁・上濁 24ウ4上・平軽 25才3去・去 同去・平
- 25ウ7上 29才5去 31ウ2 3平・平 同3平軽 32ウ5
- 平軽 33ウ1入・平 34才3平 同5入 36ウ1上 47ウ
- 3去 51才6入軽・入軽 54才2去 同3平 同3平 58才
- 3平 同3入 59ウ3去 60ウ2平 同6上・上 63ウ5上
- ・入軽 64才1平 同5去 64ウ2去 同3去・入 同3
- 平・去 同3上・入軽 同4去・去 65ウ5平・去・平 同
- 6入 66才5平・平 67才2平・平 68ウ5上・平 69才
- 1平 69ウ3去・去 同去・去 71ウ5上・去 72ウ3去
- 〔平〕 同平・平 同5去・平 74才3去 75才3去 76ウ3
- 去・去 同4平・去 同5上・平 80才3去 82ウ5上・平
- 84才1平(軽カ)・入 同〔平軽〕・平 同4平軽・上 同平
- 同5上 84ウ4去 88ウ3平濁 91才1平・去 91ウ6去
- 92才2去

99才

99ウ

註(校異)

一、校異に使用した写本、刊本及びその略記号左の通り。

コ 高野山宝寿院蔵三教勘注抄第一・二〔平安末鎌倉初間〕写本一冊
マ 尊経閣文庫蔵三教勘注抄第一〔鎌倉初〕写本一軸

ケ 慶応義塾図書館蔵三教指帰注(覚明注)慶長十五年写本七冊

刊 同図書館蔵三教指帰注(覚明注)寛永十一年刊本七冊

久 天理図書館蔵三教指帰仁平四年写、久寿二年点本一冊

岩 岩波日本古典文学大系本(底本、建長三年刊本)

一、註文中使用した各種記号は左の通り。

(1)例、2オ4、2オは翻印文各頁下脚に付した原本丁数、表(オ)裏(ウ)を示し、その下の数字は行数を示す。

(2)文字の右横に付した・は、その文字が異同のある字であることを示す。

(3)諸本の語、句の有無は文字右横の+、-で示した。

一、コ、マ本はいずれも完本ではない。夫々の校異範囲はコ、三教指帰上巻のみ、(2オ153オ4)。マ、同上巻途中まで、(2オ123オ6)。

2オ4・コ・マ・ケ・案博物志。同5・聿・マ・肇とし、右注聿本。

同6・コ・マ・ケ・伏羲氏王天下。同ウ2・史記曰老子、マ・ケ

云。同3・コ・乃遂去⁺。

3オ1・爾雅云、コ・マ・曰。同6・コ・マ・ケ・孫氏康。コ・

孫氏世録。同8・先賢伝云、コ・マ・曰。同ウ1・下螢、コ・

右注・十歟。マ・左注・十イ。ケ・十。同3・引錐、マ・引の右注・

即。同4・成実論曰、コ・マ・ケ・云。同・コ・マ・ケ・為求道⁺。

本文、為道の間右に小字、求あるか。

平安末写三教指帰敦光注について

4オ3・論語(云)、コ・マ・ケ・曰。同4・マ・ケ・竜車⁺。但し、

マ・竜の右下小字。同6・鶴(云)コ・マ・ノ・ケ・一ヲ。同

ウ1・孝経云、コ・マ・ケ・曰。同2・又云^(上)・又云^(下)・コ・マ・曰。

ケ・云。又云君子事、コ・君子なし。マ・君子事イ无。同5・不

斉論云、コ・マ・曰。

5ウ2・虚無、コ・无。与無通、コ・マ・同。ケ・与元通靈。李善

注・同じ。同7・(李)陵頓首云、コ・マ・ケ・々々答蘇氏書曰と

する。李陵頓首は、文選、答蘇氏書の文末尾にあり。但しこ

の注文は、文選・次の篇、報任少卿書の中にあり、下に続く楚

辞曰⁺の句も、当該李善注より引く。如何なる誤か。

6オ1・初学記云、コ・マ・曰。同ウ2・コ・マ・ケ・至秦ノ皇焚。

同4・後漢書云、コ・マ・曰。

7オ2・コ・マ・刊・三皇之書也。同ウ3・コ・マ・刊・云。又云、

コ・刊・曰。同・夷淮人、マ・准、右小字注・維⁺。ケ・維。

8オ3・相亡璧ヲ、コ・マ・一を。同6・マ・舌在也。同ウ5・

コ・マ・カ・藻績之綵⁺。但し、原文、績の下の文字極めて幽

か。同5・6・李善曰の下、コ・マ・刊・孟子曰、あり。李善

注・河西↓西河・右歌↓女歌。

9オ1・良史伝、コ・マ・吏。刊・史。同2・及率、コ・マ・率。

- 同4・誘道、コ・ケ・進。 同5・招下懸、コ・ケ・懸。マ・懸、但し右小字注、縣。 同・(以爲)、コ・マ・ケ・以爲。 同7・橘柚徒陽、コ・マ・ケ・久・同じ。岩・刊・徒。名義抄、徒ウツス・徒ウツス・久・徒。^{ウツリテ} 同ウ4・揉麻、マ・同じ。コ・揉。久・岩・ケ・揉。久・訓カタリ。名義抄、揉^{マシハル}。揉は揉に通ず。 同・河陽懸、コ・マ・ケ・縣。 同・託身^ヲ、コ・ーを・マ・ーヲ。 同・コ・マ・ケ・麻依⁺曾子。
- 10オ1・擒藻(ニケ所)、コ・擒。 同・如春花、コ・マ・華。ケ・花。 同5・コ・字弘嗣。 同ウ2・困基、コ・基。ケ・基。 同3・西懸人、コ・ケ・縣。
- 11オ1・コ・楊雄書曰。袖素四尺、コ・曰。 同3・(左注小字)コ・ケ・人名也。 同5・盪滌、ケ・久・岩・滌。久・訓トラカス。名義抄、二字共にその訓あり。 同6・コ・マ・滌⁺蕩揺動。ケ・滌滌。 同ウ3・文選抄、コ・マ・ケ・鈔曰。⁺ 同5・縈、コ・マ・久・同。ケ・縈。二字同じ。岩・縈、これは異字。 同7・もと、博厚配天地。天にミセケチを付す。いま除く。高明配^(天)□、コ・マ・天。
- 12オ2・ミミ歎声、コ・マ・ケ・ミミの個所、喟然。 同7・コ・マ・ケ・難曰以管窺天。⁺ 同ウ6・コ・文士⁻之筆。
- 13オ1・コ・マ・後漢書曰。⁺ 同ウ1・コ・マ・史記曰田單。 同・田單攻、コ・政。 同2・遺燕將、の次、ミセケチのつく見魯連の三字除く。 同5・排々、コ・排。マ・排を上欄注で排と訂正。久・岩・排。 同6・コ・マ・ケ・孔子与人言。⁺ コ・孔子を孔安に作る。
- 14ウ4・6・劉、コ・劉。久・岩・鄧。 同4・誇文、コ・ケ・父。マ・文。但し、右小字書入、父。 同5・神力、と読める。 同6・コ・マ・皆化成林木。⁺ ケ・作林木。⁺
- 15オ3・左伝曰、コ・マ・ケ・云。 同5・コ・マ・ケ・如石投水。 同・コ・マ・ケ・李康運命論。⁺ 同6・コ・説以遊。⁻ 同ウ3・鮑厘、コ・マ・同じ。ケ・塵。久・塵。岩・塵。名義抄、厘は塵の俗字、イチグラ。 同6・養生論云、コ・マ・曰。
- 16オ4・見草而悦、コ・同じ。マ・草を羊に改む。ケ・羊。 同ウ5・益州、コ・洲。
- 17オ2・コ・マ・ケ・史記曰齊威王廿四年魏惠王。⁺⁺⁺⁺⁺ 同3・梁王曰、コ・同じ。マ・梁にミセケチを付し魏に改む。ケ・魏。但し魏王問曰と誤る。 同・コ・マ・ケ・小国也尚。⁺ 同ウ1・干将之璞、コ・ケ・劍。マ・璞にミセケチを付し、左下に劍と訂正。 同3・コ・マ・ケ・後漢書曰胡広字伯始。⁺⁺⁺⁺⁺

18才2・蔡伯喈、マ・皆。 同・貴賤無常、コ・ケ・无。 同4・后
從諫、コ・居(カ)。

同ウ1・コ・後車戒也。⁺
19才2・列十二律、コ・列。マ・列、但し右小字注別イ。^フ

20才1・跋渉、コ・跋渉。 同2・後漢書云、コ・マ・後漢書詔曰
レツ
…注曰草行…と続く。 同4・(双行注)コ・舟。ケ・舟楫也。

同5・十州記、コ・洲。無風、コ・ケ・无。 同ウ2・4・州吁、
コ・すべて洲。 同3・恒公、コ・マ・ケ・桓。同4・恒公、コ・マ・

恒。ケ・桓。 同5・至孝ナリ、^フとあるを、いまナと読む。

21才1・困基、コ・同。マ・基。 同2・对者求止、マ・右小字注・
止之イ。 同6・貪カ如…、カにみえるが、上の清コトと対にな

っているので、事の略字の誤写とみて、コトと読むべきか。

同7・コ・マ・ケ・又云貪婪⁺無厭食也。コ・ケ・無は無。 同ウ

1・莫迥反、マ・迥。 同5・花嚴経、コ・華。

22才4・マ・鈔⁺曰、如逢之乱也⁺无。コ・ケ・この句なし。

同ウ2・拾遺云、コ・マ・ケ・曰。 同6・コ・マ・ケ・晋書曰。⁺

23才3・使之畢、コ・マ・ケ・足。ケ・使⁺便。 同5・殺其母、
殺とあるを消し、上欄にて敏と訂正。コ・マ・ケ・殺。 同6・

其子以其子塗其母用、ケ・子⁺錢⁺母⁺貴。 同・貨市旋、マ・ケ・

市。同ウ4・コ・ケ・貧女之一燈見。 同・コ・ケ・授決経云。⁺ 同

平安末写三教指帰敦光注について

6・漢書第四曰、コ・第四卷云。ケ・第四注云。

24才1・学ヲサロハ二行先の学リヤの例からヲサ(メリヤ)と読
むか。 同2・独立テリ、(補)参照のこと。テはト(23ウ11)

にみえる。いまは(補)にて示してあるように一応テと読む。

この仮名は全注文中この二ヶ所以外なし。 同2・コ・ケ・鯉
(趨)(退)。

同6・昆弟之子、ケ・兄。 同ウ1・無説(重複)、
紙の表裏替る個所による不注意か。 同3・三緘、コ・緘。

ケ・久・岩・緘。名義抄、緘ヤスシ・緘ムスフ・緘ツ、ム。 従つて緘
も意味は通ず。但し本文中に出る緘の訓はツ、ム。それ故、

緘・緘を同一に扱っているか。 同7・勿謂何傷其禍將長、
重複。繰返し分にミセケチを付す。いま、送仮名のため残す。

同・コ・ケ・不聞神將同。⁺

25才・成ヌとも読める。 同ウ4・コ・虚賦曰。ケ・云。⁺

26才1・不能紀、コ・紀記と注す。 同4・不待学、コ・覚。 同・

5・不預豫、預、右にミセケチらしきものあるか。二字通。久・

岩・豫。同・礼記云、コ・曰。 同6・コ・ケ・名親族也。コ・史記

曰、ケ・云。不預。ケ・豫。 同ウ3・コ・ケ・漢書曰。宋室、ケ・

宗。 同6・嬰母、ケ・鸚鵡。狂、ケ・猩。

27才5・(双行注)又作盆、コ・ケ・亦。爾雅云、コ・曰。コ・ケ・盆

謂之缶。 同ウ5・孝之盛也、コ・ケ・感。

28才1・求テの誤か。 同3・孫盛、コ・係。 同6・折檻の注文不
整。漢書に従い、一部順序を改む。漢書：□□^(人)□□^(也)までが本来の

注。賜尚方：(人)(頭)が折檻の下、余白小字増補書入分。

左將軍以下は壞疎の下、余白の書入。(折。以の間に入る)こ
れは原形を残す。 同7・コ・以旌直臣。また直忠イ「大事」と注。

同ウ5・ケ・弘寅下双行注なし。 同7・恒公、ケ・桓。 同ウ2・

5・コ・ケ・史記曰。

30才1・コ・ケ・後漢書曰。 同3・下商、コ・ケ・ト。コ・慎子。

同5・歴覽、コ・曆。 同ウ1・コ・宋玉登徒子好色賦。 同

4・上及徴、コ・ケ・乃。

31才1・コ・ケ・一日手著。 同4・季暹、コ・ケ・李。 同5・コ・

ケ・字勢雄強。 同ウ1・長社人、ケ・社。 同3・人草書、コ・人

とミセケチを付し、誤りとす。上句：煌人よりの誤写か。ケ。

なし。 同4・コ・南齊書云。ケ・曰。

32ウ1・焦シテ、レとも読めるが、やゝ鈍角にひらいているの

でソと認めた。 同5・更蒲、コ・ケ・蒲。久・更蒲。上欄、蒲

とあり。岩・蒲。

33才4・コ・史記曰。ケ・云。 同・高祖起將、コ・時、ケ・この四

字、高帝曰。 同・コ・ケ・運籌策。コ・於帷帳之中決勝於千里之
外。ケ・於帷帳之中決勝於千里之外。

34才2・速富当、コ・当常とす。 同4・コ・ケ・故曰猗頓。 同

5・周礼云、鄭玄云、コ・ケ・共に曰。 同・穠、コ・モチノイネ・名義

抄上述。 同6・大麥小敷、コ・ケ・大小麥。 同7・(注)亦作、ケ・

又。 同ウ1・四智、コ・ケ・久・岩・知。 同・美・陰人、ケ・華。

同5・もと片柳下恵とあり。コ・この句の前に、次々行の論語

日子曰片言…の文あり。抄出時の誤と認め除く。

35才3・コ・ケ・論語日子曰片言。コ・折獄ヲサムリケ、ケ・サタム。 同4・

コ・列女伝曰。 同ウ3・范曄、コ・范曰華キョと書く。ケ・范カ曰ク

華キョと誤る。コ・ケ・後漢書曰。 同5・高士伝云、コ・曰。

36才1・脩道、コ・ケ・修。 同3・5・華他、コ・花。 同4・得長

桑…：医の八字、コ・ケ・引用なし。 同ウ2・聖慢、コ・同じ。

ケ・漫。訓は共にケカス。釈文、慢本亦作漫。 同5・コ・尚書

曰禹。

37才1・(双行注)コ・ケ・有底袋。 同2・周公旦…於魯の十

字、コ・ケ・引用なし。 同6・造次、三教指帰本文になし。引用

論語注文を見出語に誤つたものか。 同・急遽ナルソ、コ・急ニ

遽スミヤカ・ケ・スミヤカナルソ。僵タフレ仆ソ、コ・タフレ仆にソ。

ケ・スーソ。同7・論語云、コ・ケ・曰。同ウ1・コ・ケ・用權
当世而。同2・抱首、コ・抱、ケ・抗。漢書・抗。同・連拄、
或は柱か。コ・柱、ケ・拄サ、ウ。漢書・拄。

38ウ1・4・コ・ケ・漢書曰。同2・コ・ケ・後漢書曰。同4・

ケ・淮南王劉安。

39オ2・賦鸚鵡、もと賦が三字目にあり。転倒付あり訂正。

但し文選卷十三祢衡のは鸚鵡賦。同3・ケ・因為賦。同4・

コ・ケ・左氏伝。同5・コ・ケ・漢書曰。同ウ1・コ・ケ・王

肅、ケ・肅馬。同5・而拭、コ・拭、軾シヨクス。ケ・軾。

40オ2・三略記曰、コ・ケ・云。同3・コ・ケ・短布單衣。同

4・夜半夜半、コ・ケ・長夜。同ウ4・コ・ケ・史記曰。

41オ2・コ・ケ・長鉄帰来乎。同7・覆コホス、コ・クツカヘス、

ケ・コホス。餗(ソク)、コ・ケ・コナカキ。同ウ3・コ・ケ・周礼

曰。同6・コ・ケ・漢書曰。

42オ5・漢典、ケ・書。同ウ1・コ・機密微。同2・四海(三)、

コ・ーに。同4・コ・立功加於。

43オ3・コ・処河鼓之旁。同4・同觀之意、コ・ケ・歛。同5・

コ・ケ・古今注…雌雄…同・疋鳥、ケ・匹。同ウ3・尚在時七、

コ・ケ・樹。同5・至憂夏、コ・ミセケチを付す。ケ・なし。

平安末写三教指帰敦光注について

44オ2・媼納、コ・媼細。ケ・媼納。正しくは媼納。同3・ケ・

其以法度。同5・媼水之納、同じく、コ・細・ケ・偽納。44ウ

1・展季桑門、訓読・コ・展季。桑門。同3・柳下思、コ・同

じ、同一の誤り。ケ・惠。同4・不為礼、コ・同じ。同一の誤

りか。ケ・乱。

45オ2・コ・ケ・晋書曰。同・孫登子、ケ・字。同・時人於汲

渠、コ・人入イテ。ケ・入。同3・見之親樂之、コ・この晋書の文

更に続き、…読易鼓琴の次にミセケチの付された句が入る。

得之、見之、の類似による行の取違えか。同4・好讀易、コ

・讀。同5・説文曰特佳…、特で文は切れる。これのみにて

は意味不通。コ・は前に「説文曰、隻鳥一枚也、奇也、又特也」

とあり。同ウ2・コ・毛萇伝曰。同5・円々、コ・圓々。正

しくは闕。ケ・円。

46オ3・コ・ケ・薛綜曰車声。同4・鈔曰の上、或いは余白か。

一応二字分を当てる。コ・鈔曰驪駟馬行也とあり。同5・

コ・ケ・劉良曰。同ウ2・鮑昭、コ・照に作る。

47オ5・華蓋承辰、コ・張。同6・礼記注云、コ・曰。同ウ2・

侯送口、コ・ーリ。同4・コ・ケ・奠雁壻出。

48オ2・コ・晋書曰嵇康。同5・不自締、晋

書不自藻飾。 同・竜帝、ケ・竜章。晋書同じ。 同6・(双行

注) 向日□、三字目一字空あるも、不明。 コ・ケ・呂向日。

同ウ1・琴瑟友之、或いは支とも読める。 コ・ケ・支。 但しケ

(支トモトセン) とあり。 毛萇伝・以琴瑟支樂之也とあり。 毛詩は友。

同2・コ・ケ・古詩十九首云。

49才1・雙^{□ルモノ、ハ}、コ・訓ナラフルモノ。 同5・毛詩云、コ・曰。

同・(訓) イケルトキハ、コ・字・訓・同じ。 この字、名義抄引く

も訓なし。 ケ・穀。 同ウ1・コ・韓詩外伝曰東海之。 同3・

(双行) コ・郭璞^{兼音}曰

50才3・(双行) コ・箋曰嘉旨 同ウ1・飛觴飛白、ケ・挙。 文選

ケに同じ。 同2・コ・罰爵之名也。 之名、但し小字、後より

補う。 コ・少し先に一説白者罰爵之名也とあり。 抄出者これ

との混用か。 同3・若脩環、コ・修。 同5・南都賦、コ・訓も

同じ。 帰^{カヘン} はコ・カヘナムト云事ヲ。

51才1・毛詩云、コ・曰。 同4・孟公、コ・私に誤る。 同5・

厭扱、コ・ケ・同じ。 但し扱は意味異なる。 名義抄、この字挙げ

ず。 扱が正しい。 同・(双行) コ・謂行多露。 コ・双行なら

ず、本文。 勝賢本、余白なき為双行に書いたか。 同ウ2・

コ・ケ・注曰考成也。

52才2・コ・已上⁺⁺論語。 同3・コ・孔安国曰紳大帶。 同4・鄭

玄云、コ・曰。 同5・コ・ケ・礼記曰。 同ウ1・神仙伝云、コ・

曰。 同・一名甫の下、也ありともみえるが明らかならず。 入

れず。 コ・ケ・なし。 同・孝元、コ・ケ・刊・同じ。 神仙伝七に

は孝先とみえる。 同・勾容、コ・ケ・勾容^{コウヤウ}。

53才1・同伝云、コ・又云。 同ウ1・退喜而、コ・同。 ケ・而喜。

論語も同じ。 同3・4・両都賦云、尚書云、コ・共に曰。

54才1・ケ・亡音無。 刊・工無、工は上か。 同4・ケ・故曰不可

及也。 同ウ4・董威賛、ケ・同。 刊・輩。 久・輩。

55才3・ケ・刊・倨也。 同4・ケ・刊・漢書曰。 同ウ1・少咲、

ケ・刊・小。

同3・ケ・况于反。 刊・工虚、于往反。 同4・ケ・刊・投中即

成。 同6・久・ケ・刊・千金之裘。

56才1・ケ・刊・史記七十五云。 同5・(注) 音俱、ケ・其俱反。

同・爾雅注曰。 同・アマクチネスミ、刊・アナクチに誤る。

同6・宋韵百勞反、唐韵の古の誤写か。 ケ・刊・向は誤り。 ケ・

刊・宋韵の二字なし。 同ウ1・ケ・刊・孫子荆為石仲容与孫皓

書。 同4・(双行注) 骭傷、ケ・刊・瘍。 毛詩も同じ。 同5・

本草云、ケ・刊・曰。 同・ケ・刊・医療病也。

57才1・ケ・刊・呂向曰+。慙。同3・ケ・刊・礼記月令曰+。同5・ケ・刊・吁格反+。同ウ1・ケ・警者无以与+。刊・無。この文に続く後に警者無+とあり。こゝも無か。同3・ケ・大上金録+簡文経。同・太上太道、ケ・刊・大。同4・太上之任、ケ・刊・位。同5・無宗無上、ケ・无。同6・運道一切、ケ・運遵導一切。刊・運導一切。ケ・刊・故為極尊+。同・常為処、為にミセケチを付す。除く。

58才2・(小字)曰悦反、ケ・刊・昌悦。同5・緜音香反、吉、去にもみえるが吉が正しい。ケ・刊・去更反は誤り。又、共に宋韵の二字なし。同6・以汲測、ケ・刊・深。同ウ2・井之無水、ケ・无。同5・此道告之、ケ・刊・也。

59才6・采施、コ・旄・刊・旄。同ウ2・昆崙、コ・崑。刊・崑。同3・ケ・刊・後漢書曰+。

60才5・ケ・刊・自会也+。同6・ケ・刊・魏志曰+。同・根矩、ケ・刊・短。同ウ2・列仙伝曰、ケ・云。同3・商末、ケ・刊・周。同4・ケ・刊・流沙之西。同6・ケ・刊・額工蘇朗。工は上の意か。同・長楊賦云、ケ・刊・曰。同・ケ・刊・稽顙+。

61才3・祖仙公は祖仙公の誤か。同6・ケ・面向東。刊・あり。同ウ2・無違、ケ・无。

平安末写三教指帰敦光注について

62才1・ケ・刊・内篇之序。同・欲戡、ケ・ヲサメ。同・顧鶴、鶴の誤写。刊・鶴。同3・広雅曰、ケ・刊・云。同4・ケ・神仙伝曰+。

62ウ5・青鳥公、抱朴子、青衣鳥公とあり。大足君の次に高丘子がある。不肯来子の子なし。同6・皆歴、ケ・曆に誤る。

63才5・東海ノ、ケ・ノ。同・神仙、ケ・刊・山。同ウ1・ケ・刊・大谿焉+。同4・察也、ケ・刊・なし。同5・服鳥、ケ・刊・同じ。文選・鵬。同・服虎ノ曰+の注、ケ・刊・李善注・五臣注なし。李善注・如淳曰として、陶者作ノ以下同じ。

64才1・張晏、ケ・長。同2・以其能、□の個所、或いは三か。同4・列仙伝曰、ケ・云。同ウ1・年廿九、ケ・季。同3・顔氏曰、ケ・刊・云。

65才6・史記曰、ケ・云。同ウ1・謂得、ケ・請。同4・行烈、ケ・列。同・抱朴子云、ケ・曰。同6・百妓、ケ・刊・同じ。抱朴子、技に作る。

66才2・戈高、抱朴子、弋に作る。同3・燦爛、ケ・祭。久・燦イ本とす。同ウ4・司馬彪注、ケ・刊・なし。同5・ケ・刊・莊子海若曰。北海若のこと。同6・漑之、ケ・刊・泄。二字通。

67才1・方柄、ケ・刊・柄。同3・漢書よりの引用は両都賦、文

成に對する李善注にある。ケ・引用なし。李善注では、天子見大悦、太曰、臣之師曰有不死之藥也。また樂大とする。久・岩・ケ・刊・いづれも太。 同ウ2・自可学の下、二字分不明。

抱朴子、論仙には自可求而不得とある。 同5・無致後毀、ケ・久・无。刊・無。 同・史記云、ケ・曰。女無・ケ・无。

68オ1・豸・蟻、久・蛆、上欄に豸イ本とみえる。岩・ケ・豸。 同・ケ・爾雅云。同ウ3・ケ・抱朴子曰養性志曰。 同5・ケ・坐不至疲。 同・ケ・嵇康養生論。 同・滋味前、ケ・煎。

69オ5・一曰跳、ケ・刊・百跳に誤る。 同ウ1・張揖子虚賦注、勘注抄、二行先、文選句の李善注に引く。 同2・北山移文曰、ケ・刊・文選曰とす、文は同じ。 同・芥の訓、アクタハの次、不明の字らしきものあり、一字分空いて次にカリとある。一

応アクタハ□カリと読む。名義抄、蠶、一介、共にこの訓あり。ケ・訓、アクタハカリニシテ。 同・履万乗、文選・履。 70オ1・ケ・後漢書曰。 同ウ3・ケ・嵇康養生論。養の下にミ

セケチを付し康あり、除く。養生論の上に嵇康とあつた為か。 71オ1・草葱、草ともよめる。ケ・草。荅葱に当るか。 同・葱。葱、ケ・刊・薤。 同2・ケ・刊・雜阿含經。 同・木葱、ケ・本。

同・ケ・三者大蒜。 同3・ケ・五者蘭葱。 同4・ケ・嵇康養生。

72オ3・大笑、哭とも読める。久・岩・ケ・咲。 同5・鳩、この語、指帰原文は大咲の前に在り。 同ウ2・ケ・夫棄交遊。

同5・ケ・道家之難。 同・無慶、無施、ケ・无。 73オ2・不惕、ラ行四段活用。 同2・4・無為無慮無毒、ケ・无。 同4・ケ・本草經云。 同4・無毒の下一字分の空あり。

本草經、瘰癧(ケ・疾疽)の二字がこゝに当る。但し、二字分は空なく、或いは文字なきか。 同・ケ・除熱消食。 同ウ1・2・神農藥經曰、本草曰、ケ・云。 同2・風滋、刊・湿。 同2・4・74オ3・無毒、ケ・无。

74オ3・穀実、ケ・刊・岩・穀に作る。久・の穀が正しい。 同4・ケ・一名穀実 同5・注曰、ケ・云。 同・採搗、ケ・採を操に作る。字類抄、採サクルとあり。操にサクルの訓なし。 同7・ケ・執弧蓬(矢)以射天。 同ウ1・ケ・以刺(之)即吉山中。

同2・ケ・不止者以白茅投。 同4・本草經云、ケ・曰。 同5・昭形、ケ・照。

75オ5・ケ・嵇康養生論云。 同ウ5・漿為、ケ・聚。華池、ケ・花。(次行も同じ)

76オ2・草芝肉芝、久・ケ・宍。肉と通。 同3・本草曰、ケ・云。 同4・持□ル□、或いは□レ□か。ケ・一スレハ。刊・一レハ。

同5・其滑、ケ・甚。 同ウ2・憊の音義注、ケ・なし。 同3・御口、ケ・一スルヲ。 同・驥、ケ・同じ。 史記には驥驥とあり。 同・驥温(リ)、ケ・驥。 同5・杳(エウ)冥、ケ・一エウ。 同・西京雜記云、ケ・曰。

77才3・ケ・本草経云。 有銖両、ケ・録。 無分名、ケ・无。 同5・食氣、ケ・餌。 久・同じ。 同ウ1・神明ニ(シ)テ、ケ・一ニメ。

同2・ケ・後漢書云費長房。 同7・ケ・ミ、ミ則液。

78才1・金遺録曰、ケ・云。 遣は置。 同・不死不老、ケ・刊・不老不死。 ケ・方服方寸。 同2・三百日、ケ・刊・二。 同3・天下之□□、二字不明。

78ウ1・漢書志曰、ケ・云。 同2・ケ・如淳。 同3・影到、ケ・倒。 同4・儻、ケ・久・岩・儻。

79才1・爾雅曰、ケ・云。 同2・3・ケ・西南方・西北方・東北方。

同3・西北愍天、ケ・幽。 東北文、ケ・愍。 東北文天は途中小字にて補う。 東北落敷の書入以後か。 但し同筆。 同5・穆天子伝曰、ケ・云。 同・赤鳥(ニ)、ケ・一ニ。 同ウ2・ケ・碩美也。

同4・上天、ケ・上者中天迺止。 ケ・暨及化人之宮。 同6・歳時記曰、ケ・云。

80才3・姮娥、久・ケ・恒。 岩・刊・姮。 同・旻の字なし。 或い

平安末写三教指帰敦光注について

は辨か。 名義抄・羿・羿に同じ。 ケ・双行音注なし。 同4・許慎曰、ケ・云。 同・ケ・月中遂為。 同ウ2・乗湖、列仙伝・垂。

同4・莊子曰、ケ・云。 同・ケ・之・大不知其幾千里。

81才1・淮吹、犬とあるべきところ。 同3・烈馬、ケ・同じ。 刊・列。 久・烈、上欄に列あり。 岩・版本烈とあるを列に改む。 二字通ず。 同・天文志云、ケ・曰。 同5・牽牛宿、ケ・伯、刊・泊。

久・宿、下欄に泊イ本と書入あり。 岩・泊。 同・博物志曰・旧説曰、ケ・共に云。 同ウ3・憐怕、ケ・同じ。 刊・淡。 久・憐、上欄・淡イ本とあり。 岩・淡。 同・陸老玄、ケ・黄陸イ、刊・黄。

同・ケ・道寂然無声漠然と四字を欠き、漠を寂とす。 刊・四字あり。 同4・無声・無像、ケ・共に无。

82才2・ケ・言神仙黄白。

83ウ1・相□和、相和の間、や、空く。 但し、ケ・相和。

84才1・鳩を消し、鵠に直そうとして誤るか。 久・岩・鳩。 同

4・聰、名義抄、訓ハツ。 久・醜ニク。 醜の誤りならん。

同6・任政之、ケ・也。

87ウ(こゝより上、中巻の撰び残し分を補う) 同1・コマ・(朝市、3ウ5・惜響の次に入る) 同・コマ・争名者於朝。

同3・コマ・武帝頗好(誰能係風、4才5支離懸の次に入る)

同4・如絲、コ・マ・係。 同5・(肆筵、7ウ1・蘇秦晏平の次に入る)

88オ1・(狼心、8ウ3・外甥の次に入る) 同2・(親戚有病、

前項、狼心の次に入る) 同2・3・到其敬・到其樂・到其憂、

コ・マ・致。 同4・(狎侮父兄、前項、親戚有病の次に入る)

同・狎侮君子ヲ、ニとも読めるが、ヲとす。 コ・マ・一を。 同

ウ1・3・汪々萬頃・森々千仞は36オ6・斲蠅飛鷲の次に入る

べきもの。この二句、押紙にもある通り、順序乱れ、上巻後

の方よりこゝに挿ぶ。汪々…の前句、「狎侮父兄」との間に

三行ばかりの余白あり。或はこの間抄出書写に中断ありし為

か。 同1・郭林字、コ・同じ。但し、宗、正し。

89オ2・(狂・哲、15オ2・操行如星の次に入る) 同3・(隔州

里、前項、狂哲の次に入る) 同・簿主、コ・マ・主簿。 同6・

コ・マ・遂令徳祖解⁺。同7・小女字、コ・小女の下、妙を上欄にて

補う。 同・コ・マ・字也⁻。 同ウ1・戴澗、16ウ5蜀錦の次に入

る。 同2・公輔之才、コ・マ・同じ、但し合が正し。 同3・周

処、前項、載澗の次に入る。 同4・細行の下一字分空く。

同5・溪壑、21オ4・水鏡の次に入る。 同・コ・マ・母親之曰⁺。

同6・可盈、コ・マ・一⁺。但しマ・はを消し右小字にて

満也と加う。 同・満是、コ・是満。

90オ4・咀嚼、21オ貪婪の次に入る。 同5・喫・噉、前項、咀嚼

の次に入る。 同7・已矣、21オ8・鯨鯢の次に入る。 同・見

梵網經之中、コ・マ・梵網經文引用あり。 同8・猩々、21ウ1・

酩酊の次に入る。 同・山海經云、コ・マ・曰。 同ウ1・コ・マ・

異物志曰⁺。 同・(小字注)所名、マ・所名也⁺。 コ・三字なし。

同3・術婆伽、22オ4・蓬頭の次に入る。 同・大論、コ・マ・智

度論文を引く。 同5・注曰以下の双行注、コ・マ・注曰として

小字双行にせず。 同6・老猿、22オ6春馬夏犬の次に入る。

同・雜寶藏經、コ・マ・同經文を引く。 同7・獼猴、22ウ1・倡樓

の次に入る。 同8・玉篇、前行双行注(音義)の出典。

91オ1・出肝、この語既に29オ5に出ず。その呂氏春秋より

の引用と今回の引用により、勘注抄所引全文と一致す。 同・

コ・マ・寅讀曰胤⁺。 同5・莊子曰と、これに続くもう一つの莊

子所引の注(91ウ5)・コ・ケ・刊・共になし。(マはこの個所欠卷)

92オ5・白金黄金、(こゝより中巻の補遺)76ウ3・竜驟の次に入

る。 同7・作、もと仰につくる。いま改む。 同ウ3・神

丹、前項の白金黄金に続く。

93オ3・王喬、既に80ウ3に出ず。こゝで列仙伝注を補う。ケ・

列仙伝注文と略同じ。同ウ1・牽牛渚、これも既に81オ5に出ず。前の博物志よりの引用を補い、ケ・引用注文に一致す。この句の次、約五行分の空あり。こゝ迄で指帰本文に対する正式の注文抄出は終る。同・旧説、ケ・記。同2・毎年、ケ・年年。同3・粮食、ケ・糧。ケ・而有城。同4・ケ・状如屋舎。94ウ・95オの筈笏・九族・五経の三語は、指帰本文にこの語あるも、注文はケ・と一致するものなく、これまでと内容稍異なる。同1・筈笏、42オ3・干将の次に入る。同4・九族、既に49ウ4に尚書を引用して出ず。これはそれとは全く別内容、覚書か。

95オ1・五経、既に6オ6に九経の注がみえるが、それとは関係なし。以上で三教指帰関係は終り、以下は雑記類。

(補)

1ウ2・勸、はじめ観。その上をなぞつて勸に改む。

23ウ11・24オ2・独立テリ、このテは既に注記したが、中田祝夫「古點本の国語学研究」総論篇別冊の仮名字体表をみると、ト(23ウ11)・し(24オ2)に近いものをテと読む例がみえる。

①上 四分律刪繁・補闕行事鈔 平安初加點

平安末写三教指帰敦光注について

金光明最勝王経註釈 平安初加點

②人 弥勒上生経贊

金光明王経文句 平安中期加點

③く 地藏十輪経 元慶七年加點

④て 大乘本生心地観経 院政時代加點

⑤又 平安初以来、院政期まで屢々みえる。

このうち、①は共に平安初期のみであるので無理とすれば、②、③(これも無理か)など形体的には近い。どれに該当するか遽に断定し兼ねるが、一応テと読んでおく。

38ウ2・後漢書、もと又云とあるを、棒を引いて消し、後漢書に改む。

66オ2・積骨、積の右肩にセの如きあるも、いま省く。

67オ2・難ヲ入、難の右肩少し下の「・」、或いはヲコト点の「こと」に当るか。

69ウ3・眦ヤイ、原本、セイとある。いま、セと読む。

80オ3・昇昇、恐らくは昇の誤りならん。

80ウ4・大ヲホイサ、ヲホイキサか。このキ不明。

89ウ3・絶人□、人に入る余白分なし。或いは無きか。

90オ8・山海□経、海と経の間一字分空あり。

92オ3・無不趨、不に左上から斜下に棒を引いて消してある如く見えるが、虫損か。不、そのまゝ残す。